造　形　秋　田

NO.46　（平成21年度）

2010.3

秋田県教育研究会造形部会
秋田県造形教育研究会

発信！“秋田の造形”の魅力

秋田県造形教育研究会
会長　羽　深　　進

□「久びさに、ヒットだな。」

子供たちに造形表現の喜びを味わわせる支援の仕方を**創意**・工夫しよう。
子供たちの豊かな発想力・構想力・表現力をはぐくむ題材を**開発**しよう。等、等。

20数年も前のこと。青年教師Ａ先生にとって、子供たちが帰った放課後の教室や図画工作科の研究室で教材研究をしたり、研究課題について思索する時間を過ごしたりする日々が楽しく、充実感に浸ることができた。Ａ先生は30代前半。研究室には、いつも共同研究者としての図画工作科主任と若い講師の先生がいた。

ある日の図画工作科研究室。研究室に運び込んだ１年生の立体作品について造形人３人がそれぞれの考えを述べ合う。いつもは厳しい主任が、Ａ先生が担任する１年生の教室から生まれた立体作品を目にして意外な言葉を発した。

「久びさに、ヒットだな。」

Ａ先生に笑顔。先生が開発した題材は、『のぼりぼうを　のぼったよ！』（小学１年）。

登り棒を登る自分（友達）を、紙粘土を使って思いのままにつくる（イメージした人物の形や動きを工夫し、立体で表す）という授業である。

１年生たち40名は、中庭にある登り棒の回りに集合。Ａ先生の“指示”を胸に子供たちは、さっそく代わる代わる登り棒に登ってみる。案外大変だ。手がしびれる。足が痛い。お尻が重くて…。そんな中で、“手本”に立候補したＢ君とＣさんの“模範演技”が始まった。登っていく姿に他の皆が注目している。Ｂ君とＣさんの腕や足や表情や登る格好などを、自分の五感を寄せて観察。

それでは教室へ。子供たちの大好きな図画工作科の授業が喜々として展開していく。紙粘土の感触が気持ちいい。１年生たちは、１kgの紙粘土を２つの塊に等分する。１つの塊は、人の形をつくる分も。もう１つの塊で、30cmの細長い木製の円柱（棒）を支える土台をつくる。

課題は、登り棒を登る自分（友達）の“登る格好”を創意・工夫することだ。１年生にできるかな。Ａ先生の心配をよそに子供たちは、小さな手を使ってクニャクニャ、ダイナミックな“格好”を思いのまま個性的に表現している。なかなかの出来栄えだ。（中略）乾燥した紙粘土の登る人を、土台に立てた円柱（棒）にボンドで取り付ける。子供たちの笑顔が嬉しい。そこに表現の喜びがある。

そこから生まれた40点の作品の中から２点を選び、その年の秋田県児童生徒美術展「立体の部」に出品。入賞。指導したＡ先生の目には、『のぼりぼうを　のぼったよ！』の立体作品２点が、展覧会場の秋田県立美術館のホールの中で光彩を放っているように映った。

□『立体の部』のリニューアル開催

３年間休止し、平成23年度のリニューアル開催を目指した秋田県児童生徒美術展「立体の部」。これまで、立ち上げたプロジェクト委員会で協議を重ねて作成した関係資料を、県造形研の総会及び臨時総会に提出し検討いただくことで、ようやく整理できた「立体の部」の作品募集要項と展示構想案（会場を秋田県立美術館として）を、22年度春の県造形研総会の際に各郡市の代表をとおしてお届けすることにしている。

各学校には、さっそく図画工作科と美術科の当該年度の年間指導計画に「立体で表す」を位置付けていただき、それぞれの教室での情熱的なご指導から、感性豊かで魂の叫びが聞こえるような子供たちの立体作品がたくさん生まれ出ることを期待している。

□教師の感性を磨き合った造形教育セミナー

この夏、自らの授業力を、そして自らの感性を互いに磨き合うための第43回秋田県造形教育セミナーが開催された。会場は、秋田公立美術工芸短期大学。本セミナーへは、幼稚園・小・中学校・高等学校から、造形教育に関心を寄せる教師たち68名の参加があった。

幼保小連携（一貫）教育と中高連携（一貫）教育と。午後から行われたコース別実技研修のＢコースの会場では、土粘土の感触を楽しみながら制作したり、柔らかい固型の素材を小刀で彫刻したりする活動に熱中する参加者の中に、その心地よい雰囲気に染まるように研修に励む２名の幼稚園の先生の姿が目を引いた。

一方、Ｃコース“テラコッタ造形”の会場では、高等学校の美術教師たちが小・中学校の教師たちといっしょに、美術工芸短大の女子学生をモデルにして、“ポーズする人”を土粘土で制作する実技研修に、学生のような瑞々しい取り組み方で参加していたのが印象深く、嬉しいことであった。

実技研修終了後の本セミナー参加者の表情に、満足感（達成感のようなもの）が漂って見え、安心した。

この場をお借りして、講演講師の小牟禮教授や講話くださった田村指導主事始め、コース別実技研修の指導者３名の先生方の労に心からの感謝の気持ちをお伝え申し上げたい。

□結びに

来年度（平成22年度）開催の秋田県造形教育研究大会湯沢・雄勝大会の準備も着々と進んでいる。

平成24年度には東北造形教育研究大会秋田大会が秋田市を会場に開催される。そしてその６年後の平成30年度には全国造形教育研究大会秋田大会が計画されている。“秋田の造形”の魅力を、豊かな感性をはたらかせ「私の美しい」を生き生きと表現する子供たちの姿と、子供たちの造形活動を的確に支援する教師の姿で発信したいものと考える。東北に、そして広く全国に。

そのために、造形会員が一枚岩となって研修し合い、しっかり準備をしてその年を迎えたい。

造　形　秋　田

No.46

目　　次

巻頭言　発信！“秋田の造形”の魅力

さようならのメッセージ　～お別れに添えて～ ・・・・・・・・・・・・・1

各郡市造形教育研究会の活動報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第50回　秋田県児童生徒美術展 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

第50回　秋田県児童生徒美術展　話題作一覧（平面の部）・・・・・・14

研究の記録

第43回秋田県造形教育セミナー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

講　演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

実技研修Ａ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

実技研修Ｂ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

実技研修Ｃ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

第38回秋田県造形教育研究大会　平成22年度湯沢雄勝大会に向けて ・・27

杜の都発　「今、問いかける造形教育」 ・・・・・・・・・・・・・・・29

全国造形教育研究大会2009／千葉大会に参加して ・・・・・・・・・・31

きらめく感性　ときめく思い　うみだせアート・・・・・・・・・・・・34

平成21年度　秋田県造形教育研究会役員一覧 ・・・・・・・・・・・・36

表紙絵　かたつむりさんとあそんだよ
たかせき　あかね（大阿仁小学校）

さようならのメッセージ

～お別れに添えて～

小学校図工教師として　造形部員として

由利本荘市立由利小学校
校長　三　船　文　夫

私が教員になった頃，本荘由利教育研究会の造形部は，部員70人を超す大所帯で，授業研究会の他，郡市小中学校美術展，夏の写生会，冬の研修会と授業研究も事業も大変活発であった。写生会は，十和田湖や象潟，花立高原などへの一泊旅行で，合評会などを通して先輩から美術教育だけでなく教育論や人生論まで熱くご教示いただいた。私にとっては１年１回の油絵の具の虫干しの機会でもあった。美術展の審査会は，特選・入選作品を選ぶ過程で美術教育に対する様々な考えがぶつかり合う何よりの研修の場であった。そして，冬の研修では毎回著名な中央講師を迎えて，講話や実技研修が行われた。図工科の授業研究に関しては，本荘市内の大規模小学校では教科部研究が盛んで図工部でも年数回授業研究会が行われた。造形部の先輩に厳しくも温かい指導を受けたことを忘れない。図工は，何よりも学級経営が基盤だと教えられたことが強く心に残っている。しかし，生活科が始まった頃から小学校では，学年部研究体制が強まり，相対的に教科部研究体制が弱まって図工科授業研究会が激減したように思う。今では，小学校では継続的な図工科授業研究の機会が少なくなったこと，中学校では授業時間数が少なくなったことなど，美術教育には厳しい時代となった。

そんな今，図工美術の教科特性を活かした新しい取り組みも見られる。変化の激しい時代だからこそ，教育の不易と流行をじっくりと見極め，美術図工教師としての誇りと自信を持って様々なことにチャレンジしていかなければならないと思う。造形部には，学校という職場とは違う，人間関係の温かさと造形教育という専門教科で結ばれた強い絆がある。職場での悩みや疲れを正直に話せる仲間や先輩がいた。そんな家族のように暖かい雰囲気の中で，小学校図工教師として育てられたことを幸せに思う。造形部の先輩，現役の皆さん，有り難うございました。

思い出の中から

北秋田市立鷹巣小学校
校長　澤　田　眞理子

造形教育については専門の知識もない。ただ小学６年の時に街角を描いた絵が入選し、賞品が当時にしては豪華な絵の具だったことから図工が好きになり、仲間入りさせてもらっている。ここに至るまで、多くの先輩や仲間と知り合ったが、誰もが造形指導に自信と誇りを持ち、指導法の研究や技法開発に勤しんでおり、心が広くて魅力的であった。大袈裟かもしれないが、小学校での経験が人生を左右したとも言える。

昭和63年と記憶しているが、山形開催の東北造形教育研究会版画部門で実践研究発表するようにと先輩に命じられた。知識も経験も乏しく引き受けられる状況ではないが、若輩者の私は恐れ多くてとても断れなかった。それからというもの、並み居る先輩が版画の基礎から一つ一つ指導してくれた。下絵づくりに至るまでの心の耕し、構図、彫りや刷りなどを懇切丁寧に、しかも厳しく…。大会当日は、私の拙い発表を支えようと、多数参加して分科会で心強く意見を述べてくれたことは本当に有り難かった。また、道中の貸し切りバスの楽しい旅、蔵王の宿での宴会も忘れられない。

今１つの思い出は、昨年度の全県大会大館北秋田大会である。大会開催を意識してから、何人かで各地研究会に出かけた。研究部や実行委員会を組織して構想を練り、３年越しで準備に当たった。本地区の実践を基盤に、地域の良さを絡めながら、日常の授業づくりに結びつく大会にしたかった。県事務局や関係機関の協力で、文科省奥村調査官の講演をいただき、予想以上の大会になったと自負している。成功に導いたのは、一枚岩で頑張った会員の熱意と実行力である。終えた後の感動は、今なお忘れられない。

教師として育てていただいた。たくさんの力をいただいた。支えてくださった多くの方々に感謝すると共に、造形教育研究会の益々の発展を祈りたい。

縁があって、ここまで

秋田市立仁井田小学校
校長　羽　深　　進

時代が昭和から平成に。そのころ秋田県内でも、経済的な“ゆとり”を背景にして、豊かさを象徴するようなテーマパークがいくつも誕生した。その中の代表的なものが、アトリオン（秋田総合生活文化会館）と秋田ふるさと村を建設する二大プロジェクトだった。

この２つのテーマパーク構想に共通するコンセプトは何であったか。それは、そこに入れば郷土秋田のすばらしさ（秋田らしさ）を体感できるテーマパークにすること。視覚で、嗅覚で、味覚で、触覚で、そして聴覚でテーマパークを訪れた“お客様”に秋田の文化の彩りを味わっていただこうという構想だ。**縁があって**私のような微力な者が、８年間、２つのプロジェクトチームの一員として、主に秋田県立近代美術館の建設業務とアトリオンでの美術展の企画等に関わせていただいた。

ここは仁井田小学校の校長室。校長室では、平山郁夫画伯の日本画（複製）や秋田県出身油彩画家斉藤寅彦氏の水彩画（原画）に加えて、最近秋田公立美術工芸短期大学で求めた“あきたガラスフェスタ2009”の染色作品が壁面を飾り、その床に、校長の労作「奏でる」（木彫作品）を鎮座させてもらっている。

そこに（校長室）入ると、美術教師（の校長）らしさや心の叫びみたいなものが、ここを訪れた特に子供たちの瑞々しい感性をくすぐることができたら、という願いがそこにあった。

37年間の教職生活を振り返るとき、まず大過なく今日までこれたのは、多くの先輩諸氏の導きがあってのことと思う。縁があってここまでたどり着けた、これが実感である。ご指導くださったたくさんの方々に心からの感謝の気持ちをお伝え申し上げ、ペンを置く。

各郡市造形教育研究会の活動報告

鹿角造形教育研究会

会員数　14名

組織　会　　長　石　岡　ひな子（平元小学校校長）
　　副会長　永　井　孝　久（小坂中学校教頭）
　　事務局　中　村　雅　子（平元小学校）
　　会　　計　中　村　雅　子（平元小学校）

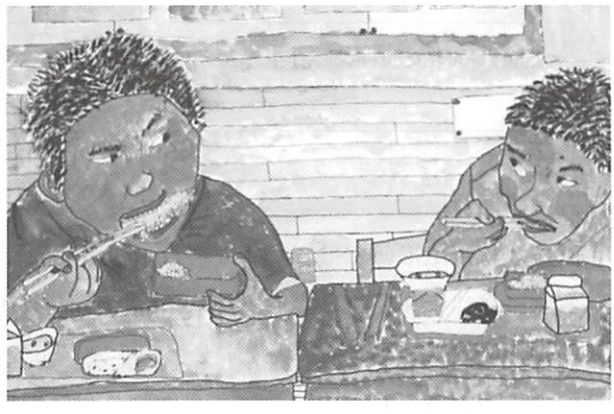
主な事業

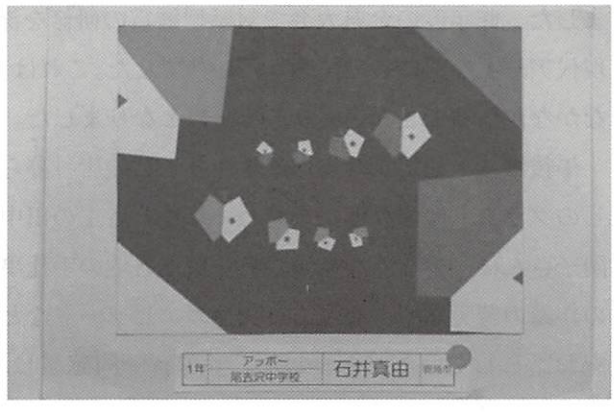
平成21年度総会（花輪第一中学校）　4／24	県造形教育セミナーへの参加（夏季実技講習会を兼ねる）　8／18
県児童生徒美術展鹿角審査会（花輪市民センター）　12／1	鹿角小中高合同美術展（花輪市民センターホール）　1／16～1／20

研究会の記録

・実技講習会は，今年度は県の造形研究大会が行われたため，それに充当した。秋田市での開催だったが、４名の参加者があり、実技講習も受けることができた。講演は、ガラス工芸の第一人者の小牟禮先生からたくさんの作品を見せていただけたり、ガラス工芸の普及のために努力されていることなどを拝聴した。有意義な１日だったと思う。

・今年度も鹿角小中高合同美術展を例年並みの規模で開催することができた。準備，撤去作業を造形会員の他花輪・十和田高校の美術部員の皆さんに協力していただき、大変助かった。両校美術部員の皆さんは自分たちの作品展示作業が終わった後，小中学生の作品を興味深そうに見ていた。今後も小中高が協力し合いお互いの励みになってよりよい展覧会ができればと考えている。また，高校の部でも独自に審査会を開き，花輪高校や十和田高校の美術部の先生方の講評やアドバイスに熱心に耳を傾け，今後の授業に生かそうとしていた。





大館・北秋田造形教育研究会

会員数　45名

組織

会　　長	佐々木　久　隆	(阿仁中学校校長)
副会長	澤　田　眞理子	(鷹巣小学校校長)
	米　澤　喜一郎	(扇田小学校校長)
	金　澤　裕　子	(大館南中学校教頭)
事務局	鈴　木　正　樹	(鷹巣南中学校教諭)
会　　計	松　田　由　佳	(合川中学校教諭)

主な事業

大館北秋田総会（鷹巣中学校）　4／16	大館北秋田造形研実技研修会「十和田市現代美術館」と「暮らしのクラフトゆずりは」を訪ねて　8／11
秋田県児童生徒美術展地区審査会 素描集「北の造形」第42集審査会（田代公民館）　11／24	第31回　絵を見て語る会（田代公民館）　1／15
素描集「北の造形」第４１集発刊配布　1／15	理事会（鷹巣南中学校）　2月

研究会の記録

大館北秋田造形研では、隔年で実技研修会を開催しています。その様子を紹介します。

今年度は、十和田市に平成20年度に開館した「十和田市現代美術館」を訪れ、現代アートの数々を鑑賞しました（写真）。国内外で活躍するアーティストたちの作品が数多く展示されており、本物のアート作品が持つ力に心揺さぶられました。さらにそれらの作品を前にして、参加者による対話型鑑賞の模擬授業を行いました。昨年度の全県大会で対話型鑑賞の研修を深めてはいたものの、いつもと違う雰囲気の中で、巨大な現代アートを前にして戸惑うばかりでした。これは、なかなか体験できない実りある研修となりました。

午後は、十和田湖畔にある手作り工芸の店「暮らしのクラフトゆずりは」を訪ねました。店主の田中陽子さんに、少なくなりつつある東北各地の手仕事の作家の苦労話や、心温まる交流のエピソードなどをお話ししていただきました。参加者一同感激し、東北各地に脈々と息づいている手仕事の素晴らしさを再認識する訪問となりました。

本研究会では、これからも一層の研鑽に励み、子どもたちのために頑張っていきたいと思います。

能代・山本造形教育研究会

会員数　35名

組織

会　　長	佐々木　彰　子（上岩川小学校）	
副会長	田　中　範　子（向能代小学校）	長　浜　笑　子（八竜中学校）
会計監査	田　森　　舞（能代第一中学校）	青　山　則　子（能代南中学校）
事務局	芹　田　　亨（東雲中学校）	
理　　事	岩　谷　修　一（能代東中学校）	佐　藤　美奈子（常盤小学校）
	越　前　　芳広（能代第四小学校）	大　髙　洋　子（八森小学校）
	渡　部　悦　子（能代第二中学校）	珍　田　和佳子（二ツ井小学校）
	大　高　絵里奈（二ツ井中学校）	岡　　真千子（湖北小学校）
	工　藤　秀　樹（山本中学校）	

主な事業

○夏季研修会
「一人一人がイメージをつかみ取る支援の工夫」
7／24

○授業研究会
「ならべて　つなげて」造形遊び（小1）
11／4

○全県児童生徒美術展審査会
12／15

研究会の記録

○夏季研修会

宮城教育大学非常勤講師である美術教育家新妻健悦先生を招き、今年度の研究テーマである「一人一人がイメージをつかみ取る支援の工夫」に沿って講話をして頂いた。実際に布団を用意して、「何を休ませてあげるか、想像してみよう」、「この袋に何を入れようか」など、子どもの心を動かす題材設定の在り方に感銘を受けた。

○授業研究会

三種町立湖北小学校ご協力を頂き、授業研究会を開催した。題材名を「ならべて　つなげて」として，牛乳パックなど身近にある様々な材料を活用した造形遊びが体育館いっぱいに展開された。新学習指導要領（図画工作科）の重点である「素材との出会い」と「豊かな情操を養う」ための評価の在り方など，昨年度の研究の成果を生かし、充実した研究会になった。

おわりに

今年度より、能代・山本造形部会は、能代市図画工作・美術部会と会を一本化した。初年度にあたり、研究テーマを、～子どもの思いを広げる授業をめざして～「一人一人がイメージをつかみ取る支援の工夫」と改めスタートすることができた。新たに部会の中に研修班を設け今後の研修内容の充実を図っている。次年度も，子どもが感性を働かせ、生き生きと活動できる授業の在り方を研修していきたいと思います。

（事務局　東雲中学校教諭　　芹田　亨）

男鹿市造形教育研究会

会員数　９名

組織　会　　長　桐　生　登志夫（北陽小学校）
　　副会長　船　木　鈴　子（船川南小学校）
　　事務局　秋　本　謙　逸（男鹿東中学校）

主な事業

男鹿市校長会研修部造形部会教科半日研修（10／14）

男鹿市児童生徒美術展（11／11～11／25）

秋田県児童生徒美術展審査会（11／11）

研究会の記録

教科部会研修会が10月に行われた。今年度は潟西中学校伊藤覚先生から「光を生かした造形」という内容で実技研修会を行った。２時間弱の時間、参加者の先生方が思い思いに作品制作に取組、最後に全員で作品鑑賞を行った。さらに中央教育事務所指導主事の鎌田悟先生からは今後につながる指導・助言をいただいた。

11月には男鹿市児童生徒図工美術作品展を男鹿市ハートピアギャラリーを会場にして開催した。平面作品のみ150点の出品であった。今年度も、全ての小・中学校からの出品が男鹿市児童生徒美術展の審査会では市内のすべての学校から出品があった。出品作品の中から２点ずつ話題賞を選出した。審査会では男鹿市の美術教育に貢献し、退職した富樫耕一先生に特別審査員をお願いした。特別審査員と造形部員が互いに意見を出し合い、楽しい雰囲気の中で審査を行った。

また、同時に秋田県児童生徒美術展の入賞作品審査も行った。昨年に引き続き、市内のすべての小、中学校から出品があり、学校ごとに特徴のある作品が集まった。

２年ぶりにハートピアギャラリーで男鹿市児童生徒美術展を行った。会場は素晴らしいのだが、地理的な問題でなかなか多くの方に来場してもらうことができないことが悩みである。来年度の課題として今後の美術展のあり方を話し合っていきたい。

（文責　男鹿東中　秋本　謙逸）

潟上・南秋造形教育研究会

会員数　15名

組織

会　長	中川真人（大潟小学校）	
副会長	築瀬智美（天王小学校）	中川　努（天王南中学校）
事務局	伊藤　晃（大潟小学校）	
運営委員	都留賀津人（天王中学校）	近江和佳子（羽城中学校）
	小林　理（大久保小学校）	遠藤祐子（五城目小学校）

主な事業

・総会　4／16(木)	・第１回運営委員会　6／3(水)
・夏休み造形教室　8／5(水)	・教科等研修会　9／9(水)
・第２回運営委員会　11／26(木)	・子どもの絵を語る会　12／8(火)

研究会の記録

(1) 研究主題　よろこび・わくわく　新たな発見　～キラリ感じてつくる子ども～

(2) 活動の概要

① 夏休み造形教室

◆会場　五城目町野鳥の森

◆講師　自然観察員　小林 秋子氏

◆内容　木の実，木の枝などを使ったオブジェの制作

◆対象　潟上・南秋地区の小・中学生（午前28名，午後15名）

◆所感　・自然豊かな環境のもと，普段学校ではなかなか得られない子どもの興味を引く豊富な自然素材と充実した工具，造形部員の的確なアドバイスがあり，子どもたちが材料から豊かに発想したり，発想を生かした作品作りを楽しんだりすることができた。

② 教科等研究会

◆会場　潟上市立天王中学校

◆講師　本部会会員　都留賀津人　氏

◆内容　実技研修　グラフィックソフト体験

◆所感　・openoffice.org のソフトを使って実技研修を行った。会員のほとんどが数年ぶりのグラフィックソフトの研修であったが，ソフト自体の技術的進歩を体感するとともに日常の造形教育への広がりの可能性を考えるきっかけとなった。

③ 子どもの絵を語る会

◆会場　潟上市昭和公民館

◆内容　県児童生徒美術展の作品審査と，子どもの絵の見方研修

◆所感　・出品しない学校の多くは造形部会員がいない学校であり，ここ数年で固定化している。潟上・南秋の造形教育の発展のためにも，できるだけ多くの学校が参加できるようにはたらきかけを続けていきたい。

秋田市造形教育研究会

会員数　61名

組　織

会　　長　佐藤一彦（下浜中学校）
副会長　加藤義昭（旭川小学校）
　　小松文子（飯島小学校）
　　榎　美和子（桜小学校）
事務局　奈良隆一（外旭川中学校）　中村公俊（泉中学校）
　　小林さおり（秋田東中学校）　伊藤知佐子（御所野学院中学校）
会　　計　松田由紀子（外旭川小学校）

主な事業

鑑賞研修会 ディック・ブルーナーに学ぶモダンアートの楽しみ方　（千秋美術館／5月27日）	大森山動物園 第32回親と子のふれあい写生大会 （大森山動物園と共催／7月24･25・26日）
実技研修会 紙をもとにした発想トレーニング （仁井田小学校／11月11日）	秋田県児童生徒美術展秋田市審査 （旭川小学校／12月５日）
クロッキー巡回展 ： 市内各小学校 （審査：泉小学校／12月28日）	実践発表会 （遊学舎／２月10日）

研究会の記録　　実践発表会（遊学舎〈会議室〉／２月10日）

実践発表①　「低学年で行う鑑賞学習について」
秋田市立仁井田小学校　石川未加　先生

小学校低学年を対象にした対話型鑑賞の実践紹介。授業の中でアートゲームを行い、楽しく学習する雰囲気を作る、まとめでも考えたことを絵で表現するスペースを設けるなど、低学年の子どもが「えとなかよし」になるための様々な工夫がなされていました。

実践発表②　「手軽に実践できて、
意欲的に生徒が取り組める様々な実践について」
秋田市立勝平中学校　芳賀典子　先生

中学校における材料の調達、立体作品の保管、授業の組み立てなど日頃から実際にやっている様々な工夫の実践紹介。100円ショップで購入できるグッズの利用方法には、その発想の柔軟性に感心しました。また、題材の始めに基本技法を全員で練習するなど、授業の進め方にも独自な工夫がありました。

質疑応答も活発に行われました。また、今回は指導助言者として秋田大学教育文化部　准教授　長瀬達也 先生も出席して下さり、的確で奥の深いお話をたくさんいただき、充実した研修会になりました。

本荘由利造形教育研究会

会員数　26名

組織　会　　長　三　舩　文　夫（由利小学校）
副会長　三　保　知　子（上浜小学校）　　三　浦　直　巳（直根小学校）
事務局　安　保　　純（象潟中学校）
研究部長　菊　地　邦　彦（仁賀保中学校）
会　　計　宮　田　幸　江（子吉小学校）

主な事業

平成21年度造形部総会	造形部研修会　12／7
造形部実技研修会　7／30	機関紙「マホガニー」の発行
本荘由利児童生徒美術展　11／13～16	その他　本荘由利小中学校の図工・美術の研究授業への参加

研究会の記録

1．はじめに

各校の教科研究の中で造形部員がそれぞれ研修を進め、地区の研究会などで実践や児童生徒の作品を発表し合い研究を深める。また、教科別研究集会や夏期研修、研究部会、児童生徒美術展、秋田県児童生徒美術展の平面審査への参加など様々な形で積極的に研修を持つ。

特に児童生徒美術展は各校の造形活動の取り組みを紹介し合う場となっており、より幅の広い意味での情報交換の場となっている。また、奨励賞作品の選出作業を通して作品の見方や造形活動の在り方について研修を深める場はとても有効である。

2．各事業の成果

⑴　造形部実技研修会（7月30日）

由利小学校を会場に今後の図工・美術の授業に生かせる講演と実技の研修であった。アトリエ・コパン造形教育究所主宰・宮城教育大学非常勤講師の新妻　健悦先生をお招きして講演テーマ**「表現をやめると造形活動はもっと楽しくなる」と実技研修「探索的活動によるお面づくり」を実施した。講演における「図工・美術におけるA言語B言語」という新しい考え方を知ることは有意義であった。お面作りは今後の図工・美術の授業に生かせる楽しい実技研修であった。**

⑵　児童生徒美術展（11月13日～16日）

本荘文化会館地階会議室で開催した。テーマ「描くこと・つくることが大好き」を反映した個性豊かな作品が多く見られた。昨年同様，立体作品の充実には目を見張るものがあった。

今年度から出品作品の中から造形部がめざす作品を「奨励賞」として選出した。各部員の熱心な取り組みと各校の協力で，運営面・作品の内容共により充実した展覧会となった。

⑶　造形部研修会（12月7日）

本荘文化会館地階会議室にて県児童生徒美術展平面の部、本荘由利公開審査会として行った。本年度も月曜日の実施となったが，各校の協力によりスムーズに審査を進めることができた。

造形部員にとっては，児童・生徒の絵について話し合う有意義な研修の場となり，今後の授業に役立つ情報を得ることができた。

⑷　機関紙「マホガニー」の発行

来年度の総会時に発行予定。内容は平成21年度の造形部員による実践研究や指導案，部員一覧などの予定である。

大曲・仙北造形教育研究会

会員数　42名

組織

会　長	小原　靖	(南外西小)
副会長	高橋　克明	(南外中)
事務局	高橋　涼	(大曲中)
会　計	高橋　涼	(大曲中)

小林　高太郎（角館中）

主な事業

○夏季研修会

「地域の作家探訪と手作り体験」

8月7日(金)　仙北市田沢湖地区

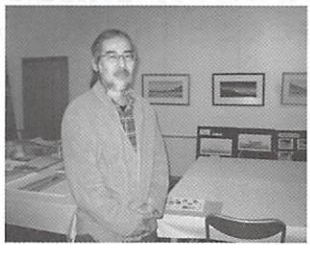
・内容

三村治男（ミムラハルオ）氏と

～創造の心・自然保護について

大いに　語ろう～

今年度の夏季研修会として仙北市田沢湖にアトリエを持つ三村治男氏と語る機会を設けた。三村氏は木版画の制作はもちろん、自然保護に関しても様々な活動をしており、造形的な観点と環境の二つの観点から見学し話を伺うことができた。作家本人と実際にお会いし、そのお人柄に触れることで深く多くのことを学べたと思う。午後からは田沢湖畔にあるハートハーブに移動し、体験プログラムに参加した。多くの会員が参加し内容の濃い研修会になったと思う。



○第41回大曲仙北児童生徒美術展

11月20日（金）搬入・展示・審査

11月21日（土）～23日（日）

児童生徒美術展

会場：大仙市大曲交流センター

	平面	立体	合計
小学校	633	156	789
中学校	292	54	356
合計	925	210	1149

昨年に比べ若干出品数が減った。しかし、初めて全ての小中学校から出品があったことは特筆すべきことである。傾向としては小学校に共同作品が多く見られ点数は減ったが平面・立体とも大きな作品も数多く見られた。中学校は時数の少なさのせいもあるのではないかという話も聞かれた。この展覧会を楽しみにしている地域の方々も多くおり、今年度も入場者数は3000人を越え、盛り上がった美術展となった。

研究会の記録

今年度は教科研究会の公開のない年度であったため、研究会としての動きがあまりなく、パワーを貯める年になったと思う。会員の先生方には来年度の教科研究会に向け教材研究や研修会、各種研究大会への参加を呼びかけている。

今後も大曲仙北造形教育研究会のテーマである「思い豊かで楽しくてたまらない造形教育」を求めて様々な活動に取り組んでいきたい。

横手市造形教育研究会

会員数　28名

組織　会　長　柴　田　　薫（金沢小学校）
副会長　黒　澤　正　尚（旭　小　学　校）
副会長　石　川　喜美子（大森小学校）
事務局　高　橋　輝　樹（大雄中学校）
会　計　高　橋　輝　樹（大雄中学校）

主な事業

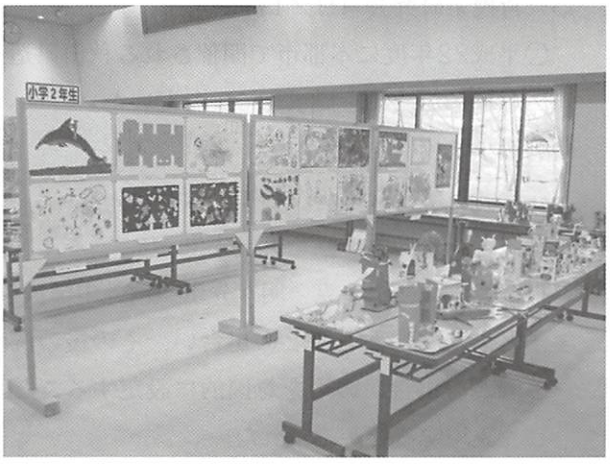
横手市教育委員会、横手市子ども育成連合会主催の行事「つくってあそぼう」では、「すてきなコースターづくり」「オリジナルキーホルダー・マグネットをつくろう」を企画した。それぞれマーブリングでのコースター制作と色粘土でのキーホルダー制作をした。たくさんの児童生徒が来館し大盛況だった。

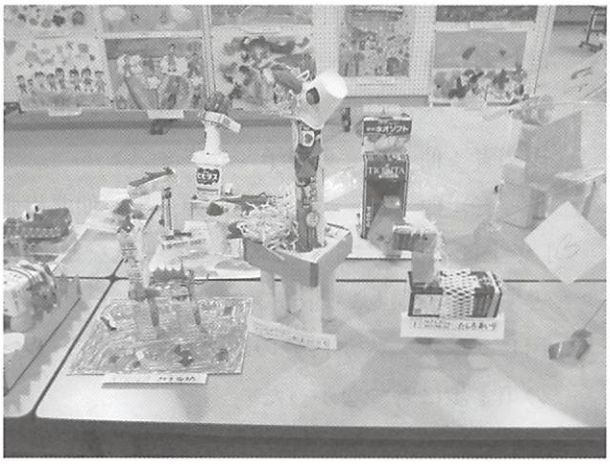
（9／12）

第35回横手市児童生徒美術展では、各校から工夫された力作が勢揃いだった。会場が初めての場所だったが，会員の協力のもと、児童生徒の心にのこる展示会ができた。会期が2日間にもかかわらず、たくさんの来場者だった。小学生の立体作品も年々パワーアップしているように感じた。中学生の作品もオリジナリティーあふれるものばかりだった。（11／30）

研究会の記録

今年度は11月に行われた横手市児童生徒作品展への出品を中心に活動が行われました。昨年度までは増田まんが美術館での開催でしたが，今年度は雄物川コミュニティーセンターを会場に行いました。初めて開催する場所であったにもかかわらず，大勢の方が展示会に来てくれました。また，9月には「つくってあそぼう」という横手市教育委員会、横手市子ども育成連合会主催のイベントに、造形研のブースを設け児童や園児とマーブリングや粘土造形を行い、ふれあいを深めながらつくる楽しさを味わいました。統合される学校もあり、生徒数の減少が懸念されておりますが、このような展示会をきっかけに児童生徒一人ひとりが完成の喜びを味わい、感性のおもむくままに最高の作品を作ってほしいと思っております。





湯沢・雄勝造形教育研究会

会員数　30名

組織

会　　長　芦　原　清　巳（元西小学校）
副会長　佐　藤　義　昭（湯沢北小学校）　加　藤　久　夫（東成瀬中学校）
事務局　藤　原　和　彦（横堀小学校）　長　雄　義　明（山田中学校）
　　高　橋　香　理（東成瀬中学校）
会　　計　藤　原　和　彦（横堀小学校）

主な事業

・郡市教育研究会総会：研究テーマ、活動計画、役員の決定　4／16

・第１回役員会：今年度の事業、一斉授業研究会等の確認　6／3

・一斉授業研究会：駒形小学校　湯沢北中学校　9／17

・第２回役員会：県美術展及び郡市地方展、H22県造形大会について　10／20

・県美術展審査、地方展開催、撤去　11／26～11／29

・第３回役員会：事業の反省、H22年度の計画、会誌「このゆびとまれ」製本２月

研究会の記録

◎一斉授業研究会（9／17）

○平成22年度に本郡市で開催される秋田県造形教育研究大会を意識した授業を提示していただいた。

◇駒形小学校（1年）

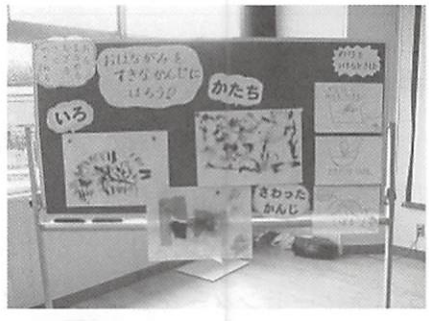
題材名：すきな　かんじに　はりたいな
授業者：松　岡　直　美　先生
指導者：高　橋　克　明　先生（南外中学校校長）

・子どもたちとお花紙との出合い，その後の洗濯のりの心地よい感触との出合いの場を意図的に設定することで，発想を広げ楽しく表現する姿がみられた。

◇湯沢北中学校（1年）

題材名：音のイメージを表そう
　　～合唱曲『勇気をください』の世界～
授業者：仙　道　真理子　先生
指導者：西　野　美　佳　指導主事（仙北出張所）

・1年生にとっては歌詞や音色，雰囲気などのイメージを色や形で表すという難しい題材であったが，モダンテクニックなどを多用し，一人一人が自分の思いを表現することができ，抽象表現の第1歩にもつながった。



第50回　秋田県児童生徒美術展

期　間：平成22年１月７日(木)～10日(日)
会　場：秋田県立美術館
　　４日間とも開館時間帯は、10：00～17：00

○主　催　秋田県教育研究会造形部会
　　秋田県造形教育研究会

○後　援　秋田県教育委員会　　秋田市教育委員会
　　秋田魁新報社　　ＮＨＫ秋田放送局
　　ＡＢＳ秋田放送　　ＡＫＴ秋田テレビ
　　ＡＡＢ秋田朝日放送

応募数	**平面の部**			
	出品総数	4,324点	入賞	1,315点
	推　賞	131点	話題作	38点
入場者数	3,023人			

平成21年度　第50回秋田県児童生徒美術展（平成22年１月7日～10日）

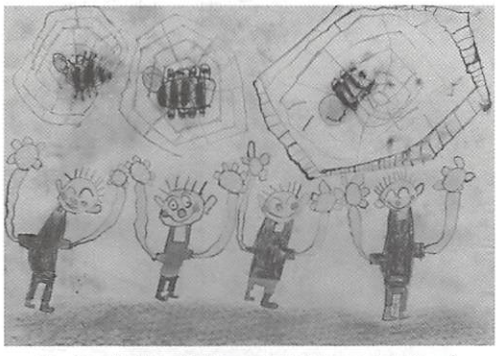
話題作一覧

（魁掲載）作品　～平面の部～

学年	題　　名	学校(園)名	氏　　名	郡　　市
幼保	おおきなくものすみつけたよ	ひかり保育園	ささき　しゅうご	由利本荘
	おおかみと７ひきのこやぎ	和田幼稚園	佐々木　優　斗	秋　　田
小１	お月さまって　どんなあじ？	船川南小学校	佐　藤　佑　哉	男　　鹿
	あきのたんけん	湯沢東小学校	さとう　め　い	湯沢雄勝
	大きなきんぎょちゃん	三関小学校	小　松　美　優	湯沢雄勝
	かたつむりさんとあそんだよ	大阿仁小学校	たかせき　あかね	大館北秋
小２	ふしぎな空とぶかめ	泉小学校	おぬま　ともき	秋　　田
	ぼくのうちの牛だよ	豊川小学校	そうま　ゆうや	大曲仙北
	たのしい森のパーティー	桂城小学校	川　田　里　桜	大館北秋
	けんばんハーモニカをふく友だち	大潟小学校	庄　司　小実昌	潟上南秋
小３	東門からジャンプ	高清水小学校	納　谷　将　人	秋　　田
	べんりでかいてきごうかなうどん号	協和小学校	加　藤　泰　成	大曲仙北
	かさの中は大きな海	三関小学校	高　橋　和　希	湯沢雄勝
	アナコンダに乗ってたんけん	合川北小学校	相　馬　俊　輔	大館北秋
小４	鯉から人や自然が生まれる	西馬音内小学校	黒　坂　一　心	湯沢雄勝
	パラダイス	五城目小学校	田　中　耕　心	潟上南秋
	秋のおくりもの	笹子小学校	今　野　千　里	由利本荘
	ゆめ色の秋	川添小学校	田　村　桃　歌	秋　　田
小５	緑の西山	大川西根小学校	田　口　智　也	大曲仙北
	三吉の森にかこまれた街	広面小学校	長　内　和　熙	秋　　田
	湖にうつる星の光	船川南小学校	佐　藤　杏　美	男　　鹿
	いらっしゃい，おいしいよ	五城目小学校	舘　岡　美　紅	潟上南秋
小６	お世話になったもの	湯沢西小学校	高　久　雄　誠	湯沢雄勝
	心の中の自分	附属小学校	田　村　悠太朗	秋　　田
	窓から見える風景	八郎潟小学校	相　馬　あいり	潟上南秋
	向日葵畑	十文字第一小学校	横　山　理　紗	横手平鹿
中１	兄の背中を見ながら	高瀬中学校	藤　原　乙　実	湯沢雄勝
	笑っている友達	泉中学校	嵯　峨　祐　也	秋　　田
	アッポー	尾去沢中学校	石　井　真　由	鹿　　角
	答えの別れ目	男鹿東中学校	石　垣　佳　奈	男　　鹿
中２	多面性	城南中学校	佐　藤　千　春	秋　　田
	初めてのバッターボックス	秋田南中学校	石　川　健　太	秋　　田
	風の光	東雲中学校	佐々木　寿　菜	能代山本
	夕方	雄和中学校	遊　佐　なつみ	秋　　田
中３	聖夜	常磐中学校	三　澤　綾　子	能代山本
	花	六郷中学校	髙　橋　知　世	大曲仙北
	線と図形のコラボレーション	鷹巣中学校	高　橋　頌　太	大館北秋
	白銀の校舎	山王中学校	藤　本　将　文	秋　　田

平面の部/話題になった作品

幼稚園・保育園



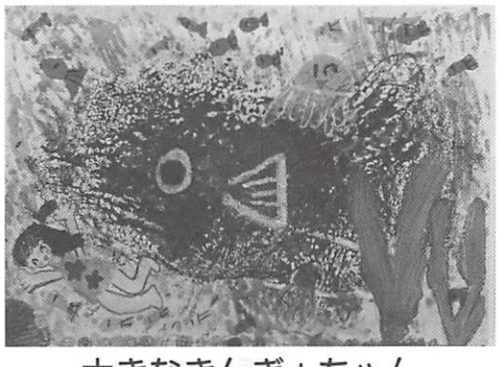
おおきなくものすみつけたよ
ひかり保育園　ささき　しゅうご

おおかみと７ひきのこやぎ
和田幼稚園　佐々木　優　斗

お月さまって　どんなあじ？
船川南小学校　佐　藤　佑　哉

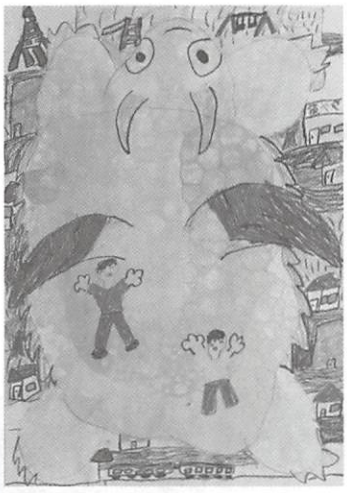
小学校作品

あきのたんけん
湯沢東小学校　さとう　め　い



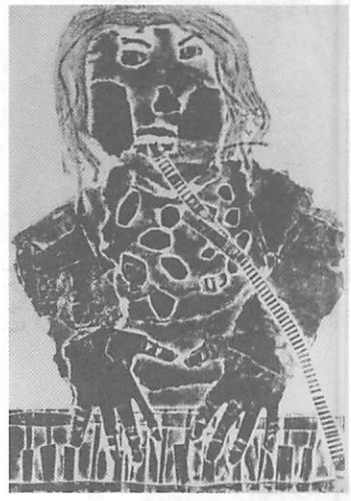
大きなきんぎょちゃん
三関小学校　小　松　美　優

かたつむりさんとあそんだよ
大阿仁小学校　たかせき　あかね



ふしぎな空とぶかめ
泉小学校　おぬま　ともき

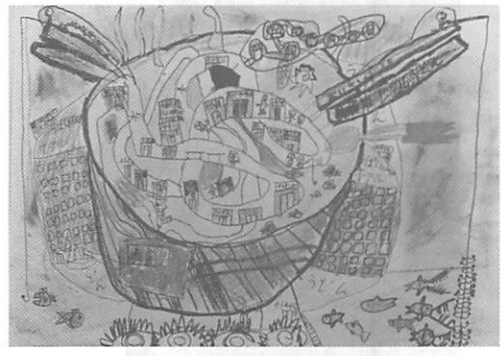
ぼくのうちの牛だよ
豊川小学校　そうま　ゆうや



けんばんハーモニカをふく友だち
大潟小学校　庄　司　小実昌

たのしい森のパーティー
桂城小学校　川　田　里　桜

東門からジャンプ
高清水小学校　納　谷　将　人



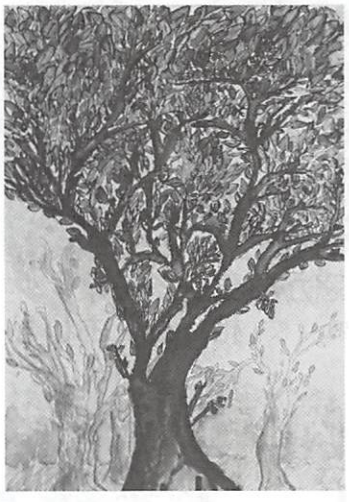
べんりでかいてきごうかなうどん号
協和小学校　加　藤　泰　成

かさの中は大きな海
三関小学校　高　橋　和　希

アナコンダに乗ってたんけん
合川北小学校　相　馬　俊　輔

パラダイス
五城目小学校　田中耕心

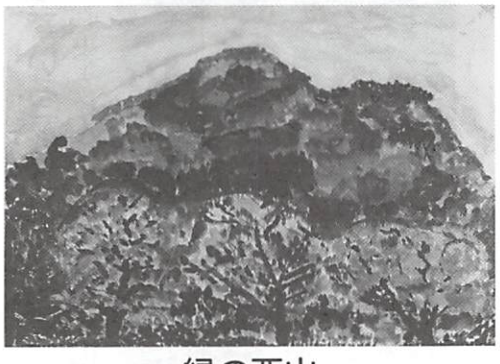
鯉から人や自然が生まれる
西馬音内小学校　黒坂一心



ゆめ色の秋
川添小学校　田村桃歌

秋のおくりもの
笹子小学校　今野千里

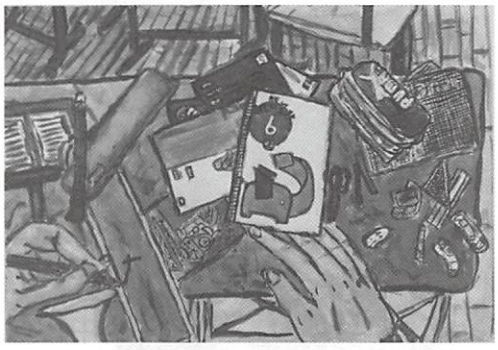
三吉の森にかこまれた街
広面小学校　長内和熙



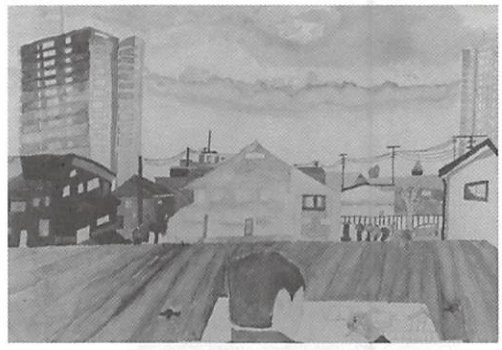
緑の西山
大川西根小学校　田口智也

いらっしゃい，おいしいよ
五城目小学校　舘岡美紅

湖にうつる星の光
船川南小学校　佐藤杏美

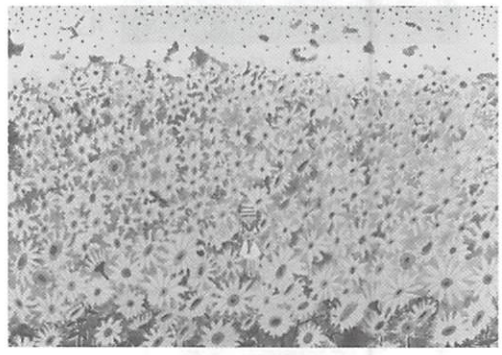


お世話になったもの
湯沢西小学校　高　久　雄　誠



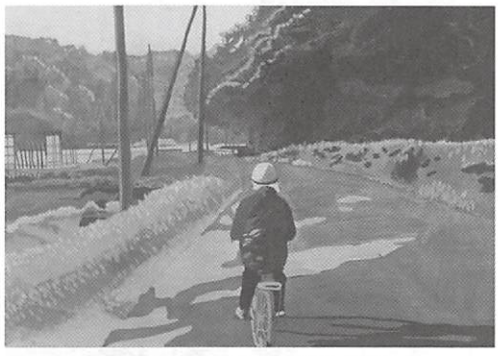
心の中の自分
附属小学校　田　村　悠太朗

窓から見える風景
八郎潟小学校　相　馬　あいり

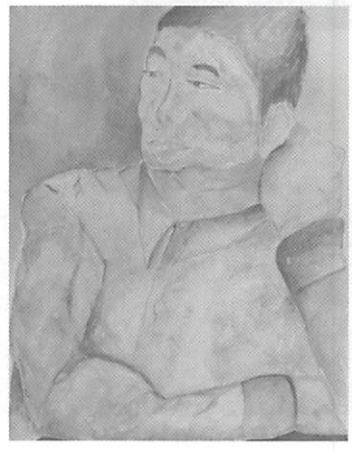


向日葵畑
十文字第一小学校　横　山　理　紗

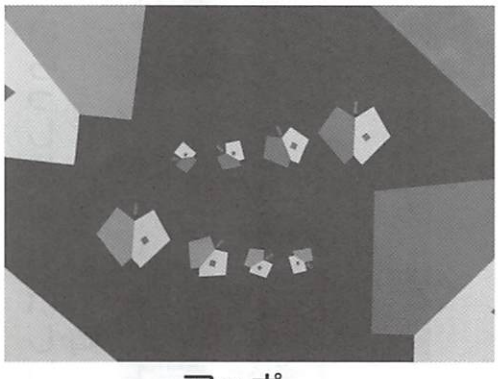
中学校作品



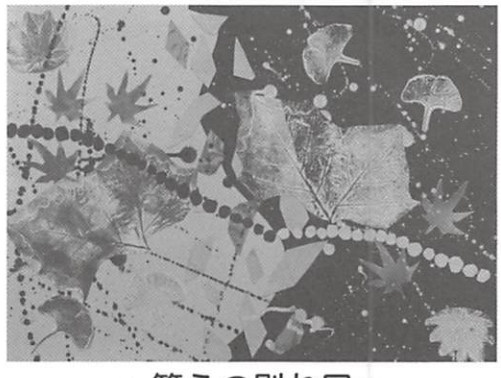
兄の背中を見ながら
高瀬中学校　藤　原　乙　実



笑っている友達
泉中学校　嵯　峨　祐　也



アッポー
尾去沢中学校　石　井　真　由



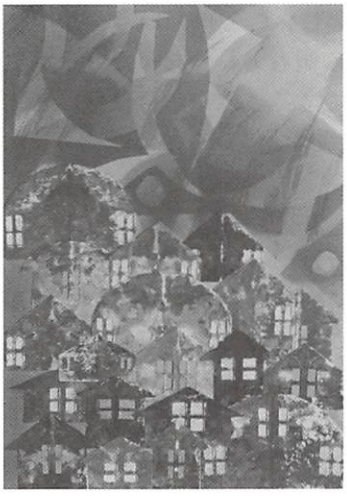
答えの別れ目
男鹿東中学校　石　垣　佳　奈

多面性
城南中学校　佐　藤　千　春

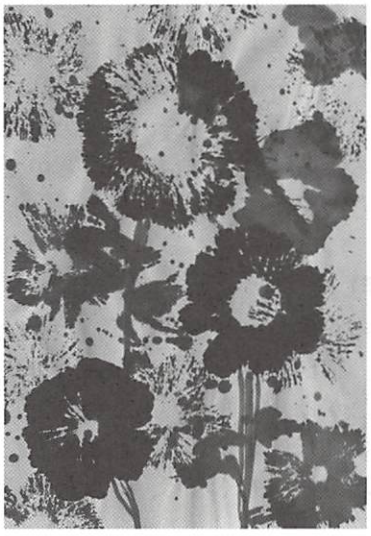
初めてのバッターボックス
秋田南中学校　石　川　健　太

風の光
東雲中学校　佐々木　寿　菜

夕方
雄和中学校　遊　佐　なつみ

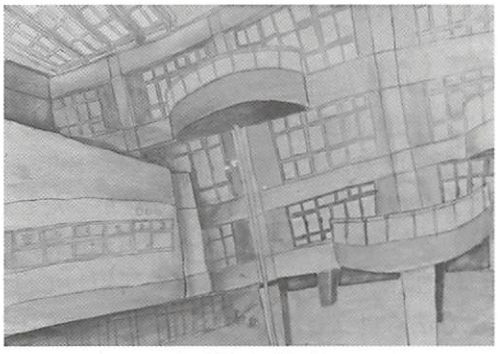


聖夜
常磐中学校　三　澤　綾　子



花
六郷中学校　髙　橋　知　世

線と図形のコラボレーション
鷹巣中学校　高　橋　頌　太



白銀の校舎
山王中学校　藤　本　将　文

第50回　秋田県児童生徒美術展　総評「平面の部」

【幼・保・低学年の部】

全体に子どもらしいダイナミックな作品が多かった。幼・保・低学年では、まだクロッキーなどを多くやっていないが、子どもは、自分の思ったことを感じたままに表現していて、絵や対象が好きだという気持ちがよく伝わってくる。子どもらしい現実ばなれした表現や、作品の中で自分の夢を実現しようとする発想の豊かな絵が多くよかった。

幼稚園・保育園の作品は、色画用紙に力強くぐいぐいと表現しているものが多く、子どもらしくダイナミックで、動物に対する思いや自分の楽しかった気持ちがよく表れている。

１年生は、絵の具遊びで偶然できた形から自分で主題やお話を見つけ、発想を広げていく作品に目をひかれるものがあった。２年生は、動物の題材が多く、対象と自分との関わりや物語性も感じられる。気持ちが伝わるいい作品が多い。対象が木や植物であってもそこに命を感じ、自分との関わりも表現されている。１・２年ともに切り貼りした作品が多く見られたが、貼らずに描いても美しい色が表現できる。新しい題材や技法の開発にも期待している。

【小学校中学年】

小学校の中学年の時期は、客観的な見方、考え方が育ってくる時期であるが、作品にも自分なりにとらえた物と物との関係に注意し、見つけたことから、自分なりの世界観をつくり上げ、作品づくりをしていった様子が見られた。どの作品からも、表現者である子ども自身の自由な想像力、鋭い感性が息づき、力動的で子どもらしい輝きを感じた。また、自分のテーマに沿った画面構成や配色など、子どもらしい工夫が画面の中で繰り広げられていた。

話題作になった作品からは、強いテーマ性を感じたばかりでなく、描きながら思いがさらに大きく膨らんでいった様子がはっきりと感じられた。「絵を描くことは、何よりも楽しいこと」という声が聞こえ、大きくふくらんでいく自分の思いを画面いっぱいに表現していて、見ている側も楽しくなったり、勇気づけられたりした。表現者である子どもの「今の思い」を大切にし、今だからできる表現を十分に保障していくことが大切と考える。子ども自身が表現する中で自分の思いをふくらませ、表現すること自体を楽しんいる作品は、子どもたちの感性の響き合いとなり、また、新しい感性を生み出していくものと考える。

【小学校高学年】

描きたいものがはっきりしていて、しっかり描画している作品が多く、高学年ならではのよさがよく引き出されていた。構図のおもしろい作品も目立っていた。彩色段階で色が濁ったことが惜しまれる作品がある一方で、透明感があり雰囲気のある色を出しているものも見られた。朝市のおばあちゃんの笑顔など、地域性がよく出ていてほほえましい作品があった。描画としての確かさがあるものや、毎日見ている山の風景を自分なりの表現方法で描くなど、描きたい意図が本人の中でこなれていることが見てとれる作品から話題作が選ばれている。

【中学校】

１年生は、環境が新しくなって感じたことを、純粋に、素直に色や形で表現している作品が多く見られた。２年生は、自己の成長と変化に伴い、自分をどう表現していいか葛藤しているのが作品を通じて感じられた。ただ、もう一歩突き出た表現がほしい。３年生は、自分の思い悩みを表現していたが、授業時数の関係などで作品に十分に向き合う時間が足りなかったと思われる。もっと描き込んでほしいと感じる部分もあった。

ラミネーターやトレーシングペーパーを効果的に活用したり、コラージュや版の面白さを生かしたりした作品が話題となった。また、写真を活用して自分の思いを表現している作品もいくつか見られた。新しい素材、表現方法も目立ったが、絵の具の魅力を十分に引き出し、描写された人物画、風景画も多かった。特に「夕方」（雄和中２年）や「笑っている友達」（泉中１年）は、固有色から離れた独創的な色づかいや独自のタッチによる表現が素晴らしかった。

研　究　の　記　録

第43回秋田県造形教育セミナー

「私の美しい」をはぐくむ確かな支援の在り方を求めて

第43回秋田県造形教育セミナーは、8月18日、秋田公立美術工芸短期大学を会場に実施され、70名を越える先生方に参会を得ることができました。

～「私の美しい」をはぐくむ確かな支援の在り方を求めて～　をテーマに、秋田公立美術工芸短期大学 小牟禮 尊人 教授の講演「ガラス工芸の魅力とその可能性」、秋田県総合教育センター　田村 稔 指導主事の講話「新学習指導要領と図画工作科・美術科のこれからの傾向」の後、活発な質疑が交わされました。

10:00～ 10:50		11:00～ 12:30	12:30～ 13:20	13:25～ 13:50	14:00～ 16:30～ 16:50	
開会行事	講話	講演	昼食	大会紹介 大会報告	コース別実技研修 Aクロッキー題材 B彫るということ Cテラコッタ造形	閉会行事

講演は豊富な映像資料による制作の実際を中心に進められ、とても興味深いものでした。

小牟禮先生とガラス工芸との出会いや制作への姿勢や思いも教えて頂きながら、先生の目指す、もの作りの本質を見ることができたと感じました。

午後からのコース別実技研修では三人の先生方からご指導いただき、盛り沢山な研修の機会を設けました。課題の山積した造形教育の現場にあって、私たちが日頃悩んでいる課題解決に多くの示唆を得ることができたと確信しております。講師の先生方には改めて御礼申し上げます。ご協力ありがとうございました。

Aコース

クロッキーを楽しもう

講師　長瀬　達也 先生（秋田大学教育文化学部准教授）

簡単なクロッキーやいろいろな用具を使っての線描の体験

Bコース

彫るということ

講師　小柳　力 先生（新制作協会会員、元秋田県造形教育研究会会長）

粘土の感触を楽しみながら、柔らかい素材を使って人物をカービング

Cコース

テラコッタ造形

講師　皆川　嘉博 先生（秋田公立美術工芸短期大学准教授）

モデルを見ながらの人物像づくり

（中村　紀幸）

講　演

演題「ガラス工芸の魅力とその可能性」

講師　小牟禮　尊人　　秋田公立美術工芸短期大学教授

今年度の講演はＴＶチャンピオン「ガラス職人選手権」チャンピオンとして有名な小牟禮尊人氏をお招きした。氏の講演はユーモアに富み、美しいガラス工芸作品のスライドの写真をふんだんに交え、また、ガラス工芸に日頃接しない者でもわかりやすいものであった。作家として、教育者として充実した日々を送る氏の講演内容に感銘を受けた。

【講演の要旨】

１．ガラス工芸及びガラス工芸教育の現状

・ガラス工芸は伝統工芸だが、あまり知られていない。例えば「がらすふいています」というと、「吹きガラス」よりも「ビルのガラス拭き」を思い浮かべる人が世間には大勢いる。

・ガラス工芸の教育機関は秋田にしかない。

・全国的にガラス工房はどんどん増えている。９年前まで秋田には一つもなかった。

・ガラス工芸品は、紀元前2000年くらいから「トンボ玉」などとして作られていた。

・高額な設備を必要とするため、日本では工業製品（１日100個程度作る吹きガラス）として作られていた。

・1970年頃から良い炉が小型化された。その結果「スタジオ・ガラス・ムーブメント」が起こり、ガラス工芸として新しいアートが生まれた。

・ガラスはきらきらしていて美しく、高価でもない。

２．ものづくりへの憧れとガラス工芸との出会いまで

・自分のものづくりの原点は、子ども時代にある。幼稚園の頃、アポロの月面着陸を見たり、東京モノレールを見たりして、自分でも何か作りたいと思った。そして、木で庭にモノレールを作って遊んでいた。当時はまだプラスチックのあまりない世界だった。ブリキの玩具、カセットテープレコーダーなど作られた物は分解できて中味がおもしろかった。自分で分解し、興味を持って、将来は電車や自動車を作るエンジニアになろうと思っていた。だから、小学生の頃は絵や美術に興味は無かった。

・高校生の頃は勉強漬けの毎日だったが、たまたま美術室に行ったら、美術の先生に「勉強が大変だったら美術やってみたら？」と勧めらた。特に「車を一台まるごと作りたいなら美術、そうでなければパーツを作って終わる」という話に、心が動かされ、美術を志すことにした。

・大学は「建築デザイン」を卒業した。卒業後はちょうどバブルのころで、自分のデザインを職人が作り、回転も速くどんどん壊されていくような状況だった。３年で退職した。お金もあったし、船を買い、カナダでサーモンフィッシングを仕事にした。そのとき、ちょっとした機会があってガラス工芸の超有名校に行く機会があり、そこで初めてガラス工芸に出会った。その時、１時間ほどで作ったガラスの花瓶が3000ドルになるのを知り、「これはすごい。商売になる。」と考えた。そして27歳で日本に帰国し、ガラス工芸を始めた。

・世界中で一番長けている才能は誰にでもあると考えている。学生にも「急がなくていい」「興味のある物から始めよう」と言っている。

3．ガラス工芸の魅力と技法について【スライド写真を交えながら】

・ガラスは永遠に残る。腐らない。(昔の粗悪なガラスも残っている）一瞬で壊れるがリサイクルできる。

・ガラスは過冷却された「液体」であって、結晶が無いので透けて見える性質を持つ。また、酸化金属による色つけが可能で、現在300種程ある。溶かす物質で様々な色、性質、固さになる。例えば、ワインレッドは「金赤」で高価なもの。また、鉛を入れれば放射線をカットすることができる。鉛が少なければ「クリスタル・ガラス」だが、環境への配慮から教育現場では使用していない。

・工業ガラスは、吹きながら回転させ型に入れ、同じ品質の物をコップなら１個１～２秒（５，６円）で大量に作っていく。

・工芸ガラスは型は使わない。曲がった形のおもしろさも追求する。学生は初めのうちは失敗と思う。教える側も柔らかく構えるようにしている。偶然の効果も「ガラスからのメッセージ」ととらえ積極的に取り入れている。

・ガラス工芸の主な技法には「ホットワーク」「コールドワーク（＝カットグラス、ステンドグラスなど)」「機炉ワーク」がある。

・秋田公立美術工芸短期大学の設備は13年目。グローリーホールは1200℃で作業中しかつけない。ガラスは500℃以下になると割れてしまうので、ハーネス（炉）は夜通しつけっぱなし。工具は1000年以上前から同じ形。材料はグラスパッチ（珪石）

・透明で泡のないガラスは技術の進歩で可能になった。現在のガラスは、純粋で高品質。

・大きい作品作りは、チームワークが必要。

・600～1200℃の作業

・ガラスの接着剤は進歩している。

・ガラスと、金銀の相性は良い。(銀を挟んで巻いて吹くなど)

・グラインダーはさまざまなテクスチャーを生む。

・回転体も魅力的な作品になる。

・ＴＶチャンピオンの視聴率は約10%。今もその影響で、美短１本で受験したい子どもがいる。入り口を広めた影響は大きかった

・出口は「就職」だが、秋田に工房はない。広げる活動の一環として、「第５回あきたガラスフェスタ2009」なども実施している。作品販売の他、赤ちゃんの手形や足形をとったりしている。

・幼稚園、保育園、小学生、中学生の子どもたちにガラスのおもしろさを肌でわかってほしい。(美短の)授業も公開している。気軽にきてほしい。

【質疑応答から】「子どもに期待すること」への答え

・今、使い捨ての時代。携帯電話　開けてみてもわからない。ダウンロードの時代

・「もの」に興味を持つように育てることが大切だ。例えば「ハンバーガーの中に何が入っているかわかる？」という質問に答えられない子どもは多い。

・目を見て話さない。わからないことはすぐインターネット

・ボタンが多い→何もやらない　人間＝動物としての能力が育たない

・子どもの将来のために手元にあるものから興味を持つようにさせる。

・今の学生　カッターを使えないことが多い。すぐ指を切る。大騒ぎ

・美術がつぶれて・・・は残念なこと。(授業の確保は大切)

(奈良　隆一)

実技研修　A

「クロッキーを楽しもう」

講　師　長　瀬　達　也　先生
（秋田大学教育文化学部　准教授）

クロッキーコースでは長瀬達也先生を講師に迎え、美術教育史や分析学の観点から見たクロッキーについての講義と実技研修を行った。

1　クロッキー題材について（講義）

日本の美術教育におけるクロッキーは、大正時代山本鼎が自由画教育を提唱した中で、子供たちの表現　をより向上させるためにはデッサンやクロッキーが必要であると唱えたことが始まり。クロッキーはもっ　とも基本的で実践しやすい題材であり、観察力や描写力の向上だけではなく、形のおもしろさや美しさの　発見ということがねらえる。しかし、安易な実施や狭い美術観での指導は図画工作科や美術科への苦手意　識を生みやすいため、十分留意しなければならない。

2　実技

題材①「私の手を紹介します－手相やしわに注目して、中から描いてみよう－」（30分）

指導のポイント

・手の中の手相やしわを先に、輪郭を後から描く。（画面いっぱいに大きく描くため）
・線の強弱を３段階程度にして描く。（線の強弱を意識して描くため）
・ゆっくりの線で描く。（速く描くと概念で描いてしまうため）

長瀬先生は15分くらいまで「まだ我慢して中の線を描いてください。」と励まされ、終了５分前に「他の人の作品を見て、もうひとがんばり。」と声を掛けられていた。参加者の作品からは指導のポイントをよく意識して取り組んでいることが感じられた。小学生の場合は、１つのめあてを達成できれば十分で、児童がめあてをはっきり意識することにより、達成感を感じたり自己評価したりすることが容易になるのではないかと感じた。

題材②「素敵なな○○さんをかこう－強弱のある一本線で－」（60分）

指導のポイント

・描き始める前に、相手のすてきなところを画面上部にメモする。小学生の場合は「おもしろいところ」などでもよい。「優しい」「サッカーが上手」など内面のことでもOK。
（相手を記号としてとらえさせないため。サッカーが上手だから足のバランスを考えるなど、対象をよく見るきっかけとなる）
・耳からかき始めるのがおすすめ。モデルに「片目をつぶって」「面白い口の形にして」などの注文を付けることもある。
（いつもと違う部分から描き始めたり、表情を工夫したりすることにより、驚きや新鮮さがある）

参加者は相手の表情などをじっくり見、集中して描いていた。最後に相手に作品を渡しコメントを書く場面があり、初対面のペアでも笑い声が上がるなど和やかな雰囲気で活動が行われた。

題材③「金ぴかスクラッチへGO」（30分）

線描の楽しさを味わえる題材。クレヨンの重ね塗りで行うことが多かったが、重ね塗りに結構時間がかかるため、色工作用紙にクレヨンを塗ると手軽に行える。描画材は割り箸を削ったものを使った。

工作用紙にクレヨンを塗ろうとすると、メーカーによってクレヨンの色が付きにくいものがあった。また、工作用紙の色によっても差があるようだ。（金色は色が付きにくい）最近のクレヨン、クレパスは混色ができるようになっていてスクラッチには不向きなものもあるので、授業前に十分試すことが必要だと思った。スクラッチは低学年の練習題材として扱われることが多かった技法であるが、不思議な暖かい雰囲気の画面を作り出すことができ、大きな紙や工作用紙を使ってしっかり取り組むことにより、高学年の題材としても使えそうだと思った。

おわりに

美術が苦手だという大学生の多くが「クロッキー」を理由に挙げるという。小中学校でクロッキー題材を行う際に、めあても示さずに漫然と取り組ませていると、児童は表現活動に対し苦手感や退屈さを感じるのではないだろうか。今回の研修では、クロッキー題材の場合も他の題材、教科の授業と同じように、その時間に達成するするべきめあてをはっきりもたせることの大切さを強く感じた。

（石川　未加）

実技研修　B

「彫るということ」

講　師　小　柳　　力　先生
（新制作協会会員、元秋田県造形教育研究会会長）

小柳先生を講師に迎え、モデリング、そしてカービングの楽しさを学びました。

1．彫刻についてのお話

「1910年に刊行された文芸雑誌『白樺』でロダンの彫刻を紹介されて以来、日本に西洋的な彫刻が広がった。」「彫刻の場合、対象を輪郭（広がり）で見ないようにしよう。深さ（斜めの面）で見ること。ミケランジェロはダビデ像を彫る時へそから彫ったと言われている。へその次にどこが高いのか…と考えながら彫り進めていった。」など、日本の彫刻の起源や彫刻を制作する上での考え方など、逸話をまじえて話されたのが印象的でした。また、「美しさの基準は民族、国、個人によって違う。」など「感性」に関する深い話を外国での経験をまじえながら紹介され、本題に入りました。

2．実技の実際

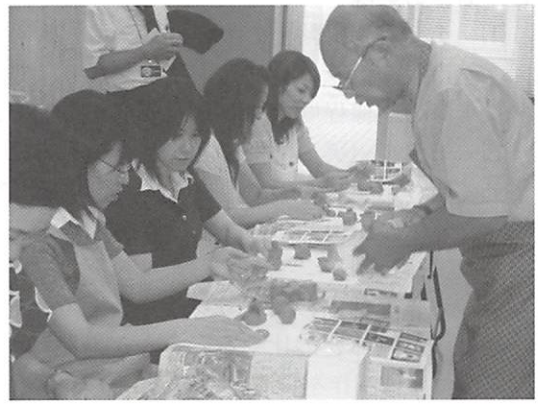
制作①　粘土でトルソをつくる（粘土半分使用）

・「＋と－」という考え方で、単純化した人物をひねり出しで作る。

制作②　粘土で「モデル」をつくる（残りの粘土を使用）

⑴　３つの球体をつくる（大・中・小）
⑵　大と中の球体を半分に切る（半球）
⑶　組み合わせて、トルソをつくる
⑷　ポーズを付け、抽象化して工夫をする

※参考資料にヘンリ・ムアの作品を鑑賞した



制作③　石膏の角材に②の「モデル」を彫刻する

⑴　「モデル」を見て角材にデッサンする
（上からと横からと２カ所）
⑵　粗彫りをする
⑶　デッサンを描きおこして彫り進める
⑷　いろいろな方向から確かめながら、彫り進める
⑸　ヤスリがけをする

※　材料・用具　　彫塑粘土１個・樹脂入り石膏・小刀・彫刻刀・のみ・のこぎり・ドレッサー・紙ヤスリなど

3．おわりに

水につけると柔らかくなる新素材の石膏は、彫る感触がおもしろく生徒にも体験させたい材料でした。モデリングとカービングの両方に取り組むという実習でしたが、粘土での「モデルづくり」が制作③の彫刻に生かされ、大切な過程であったと実感しました。粘土をこねたり、石膏を彫ったりしていると時間を忘れ、どんどん夢中になっていきました。立体制作のおもしろさを改めて感じることのできる講習でした。

最後に、小柳先生から「子どもにも、先生たちにも役立つ題材を、と思って設定した。現場では、ぜひ子ども一人一人に違う作品をつくらせるようにしてほしい。みんなで同じものではなく、一人一人のよさを引き出すようにしてほしい。」という助言をいただきました。

自分の制作にも意欲的に取り組んでいる小柳先生には、多忙にもかかわらず多種多様な資料や用具材料など、事前準備にたいへん手間をかけていただきました。また、制作時には、自らきめこまやかに参加者へのアドバイスや手助けにまわられ、一人一人の個性ややる気をひき出しいていただき、たいへん充実した研修となりました。

（藤田　かおる）

実技研修　C

「テラコッタ造形」

講　師　皆　川　嘉　博　先生
（秋田公立美術工芸短期大学　准教授）

1．「テラコッタ造形」コースについて

Cコースは、モデルをじっくりと見ながら、30cm位の高さの人物像を、「テラコッタ粘土」で造るという制作に取り組んだ。

最初の彫刻についての講義では、皆川先生が、自分で制作した彫刻作品の数々を紹介しながら、自分自身の彫刻にかける“思い”について語られた。縄文土器や古代の遺跡からインスピレーションを受けながら、抽象的な形から人物まで、様々な形を作り続けていること。「野焼き」という焼成方法にこだわり、故郷である県南の横手市十文字町において焼成をしていること。日本人が忘れ去ってしまった、原始の美意識を追究し続け、それをテーマとして制作に取り組む、ご自身の姿勢について話された。

14:00	・あいさつ、講師紹介
	・コース内容＆日程紹介
14:10	・「彫刻」について〔講義〕
14:30	実技研修（120分）
	15分×4～5回ポーズ
16:30	・閉会行事
	・感想発表、お礼の言葉
	・質問、諸連絡、後片付け

2．研修の実際

⑴　テラコッタ粘土の扱いについて

市販のテラコッタ粘土とは異なり、非常に粘りけのあるキメの細やかな粘土であり、芯材がなくても、半身の座像程度であれば、成形が可能であることを説明。

⑵　モデル（美短学生２名）とその見方について

座りポーズなので、15分を４～５回実施。１回ごとにモデル台を回転させ、モデルを一方向ではなく、立体的に360°あらゆる角度から見て認識し、制作することができるようにした。

⑶　実演と制作

大きな粘土の固まりを手でひねり出しながら、全体のバランス、人体の手足の長さと胴体との比率を考えながら制作することができるよう、先生自身が３分程度で座像制作を実演。その後、一人一人に丁寧にアドバイスと実技指導を行った。

3．焼成と作品の受け取りについて

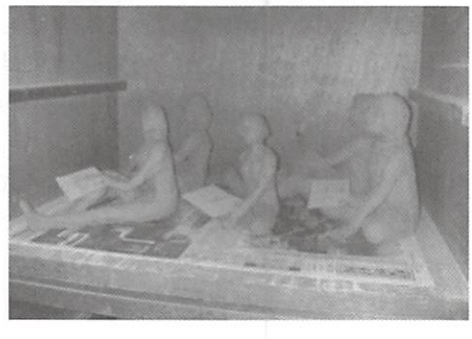
制作後しばらく彫塑室において乾燥させ、その後焼成に入るということ。今回は小品なので、大学の電気釜で一斉に焼成するとのこと。だいたい９月中に焼成をするので、10月以降に焼成した作品を取りに来てほしいと受講生に連絡。

4．おわりに

今回Cコースの講師を務めてくださった皆川先生から、セミナーを終えてのコメントをいただいたので紹介する。

「今回、造形セミナーということで、幼・小・中・高の先生方に、テラコッタ（素焼き彫刻）を教えました。皆さん非常に熱心に取り組まれ、それぞれ味のあるよい作品が焼き上がりました。モデル（美短学生）を使って、全身を造る機会は貴重だったと思います。ものを造る新鮮な気持ちを、生徒さんたちにも、是非、伝えてもらいたいと思います。」

皆　川　嘉　博　先生　より



（伊藤　知佐子）

第38回秋田県造形教育研究大会
平成22年度湯沢雄勝大会に向けて

秋田県造形教育研究会　会長　羽　深　　進
湯沢雄勝造形教育研究会　会長　芦　原　清　巳

【大会テーマ】

「感　光・風・色・形」　～豊かな感性と創造的な活動の追求～

美しいものに感動する心は、創造的な活動を誘発する

光や風を全身に浴び、色と形が織りなす時空間へ飛び立とう！

1，期日　平成22年７月30日（金）

2，会場　湯沢市立湯沢西小学校　湯沢市立湯沢南中学校

3，主催　秋田県造形教育研究会　秋田県教育研究会造形部会　湯沢雄勝造形教育研究会

4，後援　秋田県教育委員会　湯沢市教育委員会　羽後町教育委員会
東成瀬村教育委員会　湯沢雄勝小・中学校長会

5，日程

9:30	10:00～11:00		11:20～12:00		13:00～14:30		14:50～16:20	
受付	公開授業 小・中学校	移動	全体会	昼食	講演会	休憩	分科会	解散

6，内容　公開授業　小学校（表現２・鑑賞１）　中学校（表現２・鑑賞１）
授業研究会　小学校　３分科会　中学校　３分科会

7，記念講演　講師　漫画家「矢口高雄」氏　(旧平鹿郡増田町生まれ)

１９７４「釣りキチ三平」講談社出版文化賞
１９７６「マタギ」　日本漫画家協会大賞
２００９　地域文化功労者文部科学大臣表彰

＊大会に関する問い合わせ

湯沢雄勝造形教育研究会大会事務局
東成瀬村立東成瀬中学校　加　藤　久　夫
TEL　０１８２－４７－２１５５　FAX　０１８２－４７－２２４５

8，大会テーマと研究の方向について

図工・美術の原点である「人間は生まれながらにして、何かを形として表現したい」という自然な欲求をもう一度、再構築すべき支援が私たち図工・美術の教師の使命であると考え、豊かな感性を養い、「美しいものは美しい」と体感できる人間を育てたいという願いをこめて「感」という言葉に造形教育活動の全てを凝縮させた。

造形教育において「感性」を引き出すものは、自然の中の「きらめく光」であり、「そよぐ風」であり、「まばゆい色」であり、対象を「認識できる形」ではないかと考えた。「美しいものに感動する心」を育て、そのためには「形や色」などの基本的な造形的要素を捉え、表現する喜びを味わうことによって自分を開花させることが、「生活を美しく豊かに創造する力」に結びつくものと確信している。よって研究テーマを「感　光・風・色・形」と設定し、サブテーマを「豊かな感性と創造的活動の追求」とし、子どもたちがつくる作品のよさを全面的に引き出し、知らず知らずのうちに造形的要素が加味され、確固たる自己表現ができるように導きたいと考えている。

大会テーマのもとに、本郡市の子どもたちに造形教育を通して「育てたい力」は何かを明確にして研究を進めていきたいと考えている。「育てたい力」は①子どもたちが、自然や社会の中から、体の五感で感じ取り、新しい価値を見いだす力「豊かな感性」、②造形活動を楽しみ、思いを表現する力「創造的活動」と考えた。

この２つの力を大切にし、子どもたちが表現や鑑賞を通し、体の五感を働かせながら、つくりだす喜びを味わい、創造活動の基礎的な能力を伸ばし、充実感、満足感、達成感のある作品を生み出すことをねらいとしている。

【研究構想図】

杜の都発　「今、問いかける造形教育」

小学校部会～図工がつくる　わたしらしい　私～　中学校部会～美術の広がりを求めて～

第54回東北造形教育研究大会宮城大会　平成21年10月30日

湯沢雄勝造形教育研究会　　芦原清巳　　佐藤かよ子　　佐藤秀実　　長雄清美

□　はじめに　　（芦原）

宮城大会は、杜の都、仙台市で開催され、午前中の公開授業後は小学校部会がシンポジウム、中学校部会が記念講演と会場が二手に分かれて行う珍しいスタイルであった。授業会場も県美術館、仙台市立立町小学校、せんだいメディアテークの３会場に分かれ、特に目新しく見えたのが、立町小で行われた小・中連携授業「おどる光・遊ぶかげ」であった。　湯沢雄勝からは会員４名が参加し、それぞれ分担し、私はメディアテークの会場で行われた小学校２年生の「どんどんつくろう」という造形遊びを参観してきた。会場自体が、とても素晴らしく、伊東豊雄氏が設計した壁のないガラス張りの７階建ての前衛的な建物に圧倒される。

７階の窓際のホールで行われた授業は、原町小学校２年生２３名が毛糸を使い、フロアの空間スペースを利用し、自分たちの道を作っていく授業であった。子どもたちはどんどん道を延ばしていき、本棚やイスに絡めたりと明るい日差しを受けながら、道作りに夢中になり、のびのびとした楽しい授業であった。会場がモダンな空間だけに、毛糸だけでなく、布やテープなどに素材を広げたら、もっと大胆なインスタレーションを体験することができたと思う。

□　小学校Ｅ「広げる力」　　（長尾）

題材「主人公がみたゆめ」　３年生

小学校部会では育てたい力を「感じる力」「遊ぶ力」「思う力」「つかむ力」「広げる力」「小中連携」とし、研究を行っていた。

立町小学校で行われた「主人公がみたゆめ」は、「広げる力」に焦点を絞って指導を行っていた。

この題材は、自分の版に友達の版を組み合わせて、それを生かした物語を想像し、表現するというものであるが、想像を広げるために友だちの版と組み合わせるだけでなく、題材終了後に国語科で『できた作品から想像した物語を文章にする』という、他教科への広がりも設定している。

また、仙台市では以前から宮城教育大学との連携が行われていて、今回は３名の学生が指導に加わっていた。技術的な支援だけでなく、導入で自作の参考作品のプレゼンテーションを行ったり、こまめに子どもから物語のあらすじや登場人物の気持ちなどを聞き取ったりすることで、子どもたちの発想や想像が広がっていく様子が見られた。

子どもたちは、友達の版を借りたり身近な材料でスタンピングをしたりすることで物語の様子を生き生きと表現していた。版の向きや置く位置を工夫してペアの友達と話をしながら、または一人で黙々と取り組みながら、60分いっぱい楽しみながら活動していた。

作品ができたら、想像した物語が新鮮なうちに台詞や出来事を付箋に書き入れ作品に貼っていく。この付箋がもとになって国語の物語作りに広がっていいく。

『広げる力』を狙いにした今回の授業は、作品の中の物語だけでなく、友達とのつながり、自分の良さの発見…と広がっていた。

□　中学校Ｃ「伝統文化」・シンポジウム（佐か）

今回の中学校学習指導要領美術科目標に新たに加わった「美術文化についての理解を深め」の点について、どのように学習を展開しているのかを知りたくて、伝統文化「漆工芸・沈金、蒔絵」「竹でつくる」の授業研究実践発表に参加した。教師の教材研究の様子が詳しく語られたが、生徒の授業の様子やどのように理解が深まったのかについてはあまり触れられず、残念だった。発表後の分科会がなく、沈金・蒔絵体験と竹細工体験が

ワークショップとして準備されていたが、大会要項への表示があいまいで戸惑った。大会運営上、配慮の必要な点だと思った。

午後からは、県美術館で行われた小学校部会主催のシンポジウムに参加した。シンポジストは、文科省初等中等教育局教育課程課教科調査官：奥村高明氏、宮城県美術館教育普及部長：齋正弘氏、せんだいメディアアーク学芸員：小川直人氏の３名で、とても興味深い内容であった。例えば、小学３年生の児童に先生が「背景も描きなさい。」と声をかけている姿に「その子の頭の中には背景観があるのだろうか。小学３年生は頭の中で描いていて、その子の頭の中には背景がない。だから描かない。」「58歳の教師の世界観をたった10歳の世界観に植え付けようとしていないか。」「10歳の世界観にどんなお手伝いをしたら何が生まれるか。」等、発達段階を大事にした造形教育に期待する思いが語られた。また、評価についても触れられ、「音痴の子も足の遅い子も絵が下手(不器用)な子も家系のせいなのにいい評価がもらえていないのではないか。」という内容から、うまく表現するためではない、わたしらしい・その子らしい表現を目指した授業を展開していかなければならないと改めて印象付けられた。研究主任から研究の概要・本時の授業の様子について画像で紹介され、全体像をつかむことができた。

□　中学校Ｂ「鑑賞」　（佐秀）

中学校分科会Ｂでは、宮城美術館の展示彫刻を題材に、鑑賞の授業が行われた。

教科書で扱われている作品について、写真と実物の差異から実物の持つ力や迫力を感じ取らせようという取り組みであった。

扱った彫刻作品は、佐藤忠良の小品とヘンリ・ムーアの野外オブジェ「スピンドルピース」で、作品そのものから感じ取った生徒の印象を付箋紙にメモさせ、グループ内でそれぞれの意見を交換しあうことで学習を進めていた。

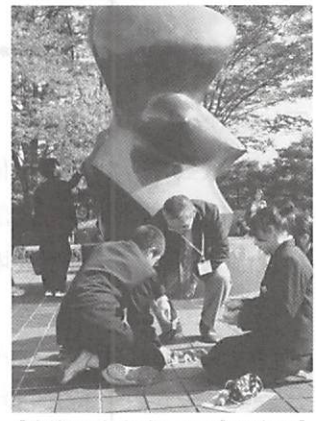
作品ごとに生徒は、「小さい…！」「細かい…！」「つるつる…！」「でっかい…！」などとつぶやきながら、新しい発見を積み重ねている様子がよく分かり、「実物を観る感覚を育てたい」という授業者のねらいに迫っていると感じた。

授業後の分科会協議では、鑑賞授業の扱いについて活発な意見が交換され、新しい学習指導要領に向けた各校の取り組みや課題が紹介されている。

話題として、

・授業としての美術館利用の在り方
・多人数での鑑賞授業の設定
・生徒の考えを引き出し、伝えあう場の工夫など

が話し合われている。


【実際に向き合って感じ取る】

授業者からは、「美術教師としての専門性を発揮して言い切ることのできないもどかしさはあるが、生徒の気付きをきっかけに、感じる力や考える力を学年に応じて積み重ね、育てていきたい。」という考えが示され、鑑賞授業の方向性を改めて確認することができた。

□　終わりに　（芦原）

今回の大会では、メディアテークで行われる予定であった木町通小学校６年生の「アニメーションの授業」が残念ながら、新型インフルエンザにより中止となるハプニングがあった。これも、その時代の流れで、災害以外の不測の事態が起きるという不思議な経験を得た。

今回の授業分科会では、「ペアの授業検討会」を体験することができた。参加者が一人一人主体的に授業改善に取り組むという趣旨から協議の時間に視点に添い、二人で話し合い、最後に発表するという形であった。少人数の分科会では、大変話しやすく、内容も濃くなり、有意義な進め方だと思った。

杜の都、仙台市で行われた大会は、美術館やメディアテーク等の最先端の文化発信施設を使い、子どもたちが環境と一体となり、参加し、自ら体験するという意気込みが感じられ、斬新でありながらも挑戦する姿勢の見える大会であった。

全国造形教育研究大会2009／千葉大会に参加して

秋田市造形教育研究会　齋　藤　知佳子

1　はじめに

11月26日，27日に行われた全国造形教育研究大会千葉大会に参加した。子どもたちは，つくることに集中し，活動していた。また，新しい自分に気づき，感性を磨いている様子も見られた。この子どもたちの姿こそが，創造している子どもたちであり，授業は，思考している姿を生み出していると強く思った。

本大会は，「きらめく感性　ときめく思い　うみだせアート」という研究主題の基に行われた。研究主題のとらえ方は次のようになっていた。

きらめく感性・・・子どもたちの瑞々しい感受性や周囲から刺激に対する直感的な心のはたらき

ときめく思い・・・喜びや期待のためにどきどきと高揚する心のはたらき

うみだせアート・・「アート」を広い意味での活動ととらえ，つくり出された結果としての作品だけでなく，ものをつくり出す過程をも含め，色，形，材料動き，質感などを楽しむ様々な活動それ自体もさす。

このようなとらえ方のもとに，きらりと輝く豊かな感性で，「もの・こと・ひと」をとらえ，わくわく，どきどきしながら思いを膨らませ，思考・判断し，創意工夫しながら表現・鑑賞する生き生きとした子どもの姿を目指すとしていた。

さらに，この研究主題を受けて，幼稚園では，「わくわくドキドキつくってあそぼう」，小学校では，「からだいっぱい心はずむ造形」，中学校では，「豊かな表現，あふれる感性」，高等学校では，「技を知る，個性を磨く」というように校種別にテーマをさらに細化していた。また，このほかに，４つのテーマを設け，部会ごとに取り組むようにしていた。

2　公開授業から

幕張南小学校では，１年から６年までの12授業が公開された。ここでは，１年「チョークのまほうつかい」４年「ぼくらのゆめ　わくわくきち！」６年「夢と希望の塔をつくろう」の３つの授業での子どもたちの姿を紹介したい。

● １年「チョークのまほうつかい」

＜題材の目標＞

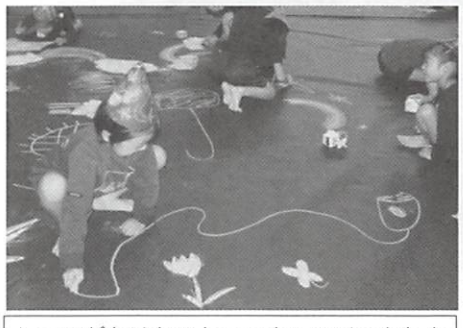
・チョークで思い思いの表現を楽しむ。（関・意・態）

・お話を聞いて，思いついたことを表現する。（発想や構想の能力）

・チョークの感触を楽しみながら，自分の思いに合わせていろいろな線や色で工夫して表す。（創造的な技能）

・自分の描いたものの話をしたり，友だちの作品を関心をもって楽しく見たりする。（鑑賞の能力）

授業が始まって間もないころの子どもたちの様子は，「黒い紙が大きくてすごいな。」「好きな色のチョークで色を描けばいいんだ。」などという程度の楽しみ方のように感じた。先生のお話を聞いて，「思いついた」というよりは，好きなものを描いているように見えた。



しっぽがおはなのところまでのびてきたよ

活動が進みに連れて，一人一人が自分の好きなものを描き並べていた活動が変わっていった。始めに自分が描いたものからストーリーをつくり出し，横に付け足していったり，関係のあるものを新たに描き足したりというように大きな紙が自分だけのキャンバスに変わっていった。自分がつくり出した世

界に体ごと浸りながら自分の描きたいものを描いていた。一人一人が自分の世界観をもち，描いたり，黒い紙の上で発色する色チョークの美しさを楽しんだりしていた。この段階で，ねらいは十分に達成されていたように思うが，子どもたちの活動はさらに高まり広がっていった。友達の描いているものの近くに伸びる長いしっぽと自分が描いたお花が組み合わせて，友達と力を合わせてつくった新しい世界が紙の上に繰り広げられていく楽しさに気づいているようにも見えた。活動しながら，新しい価値に気づき，その活動を楽しんでいる姿はひたむきで感動的であった。描き終わり，子どもたちが描いた大きな黒い紙が体育館の二階から引き上げられた。自分が描いた好きなものと友達が描いた好きなものが響き合い，新しいハーモニーがつくり出されて出来上がった黒い大きな紙が「魔法の国の壁」になったことに子どもたちは、歓喜の声を上げた。

いっしょにおほしさま　ぬっていい

わあ、ぼくのえがまほうのくにになったよ

活動の中で，新しい自分の感性に気づいたり，心を踊らせながら，次々にわき出てくる「表現したい」という気持ちを楽しんでいる様子は，４年生や６年生の授業でも見られた。

６年生では，一人10キロの土粘土使って，自分がイメージした夢と希望の塔をつくる学習が展開されていた。本時は，総時数８時間のうちの２．５時間目ということもあり，塔がしっかり立てるように心材を工夫している段階の子どもが多かった。自分のイメージにあった形づくりのために心材を選び，入れる場所を考えている子ども，どうして立てることができずに塔の形の変更を余儀なくされている子ども。自分のつくりたい形と粘土での可能な表現との狭間で悩み，折り合いをつけている子ども。どの子どもも自分のイメージを形にしようと格闘している，その姿は，強く，たくましく輝いていた。この授業で一番に感心したことは，子どもたちが，友達のつくり方を見て，自分の製作に必要と思うことは，どんどんと取り入れていたことである。上に粘土を積み重ねたのでは，重みで粘土が落ちてくると思った時に，近くにいる子どもの心材の入れ方や粘土のつけ方を自分の作品づくりに生かしていた。友達のつくり方を真似しても，自分のつくりたい塔のイメージは，始めの段階でしっかりと一人一人がもつことができているので，友達と同じ作品になってしまうというようなことはなかった。学習の導入段階で，様々な塔を鑑賞し，「自分の思いが詰まった塔のイメージはこういうものだ」というテーマ思考がしっかりできていた成果と考える。どの子にもこれまでの学習がしっかり積み重なっている結果の表れととらえることもできる。

最初とは随分と変わったよ　調子いいぞ

４年生の「ぼくらのゆめ　わくわくきち！」という学習は，小グループでの共同制作であった。わらや木，木の実，竹，木の葉，すすきといった自然物を材料にして，校地内に自分たちのお気に入りの場所をつくっていく活動である。指導案の上では，個人製作とグループ製作のいずれかを選択できるようになっていたが，本時では，全員がグループになって製作をしていた。活動しているうちに，友達の思いと自分の願いを融合させたほ

うがダイナミックでより楽しい基地ができると気づき，自然発生的に個人製作からグループ製作に変わっていったと思われる。グループ製作は，個人の思いがうまく出せなかったり，人任せになてしまったりすることもあるが，全くそんな様子は見られなかった。一人一人が自分の思いや願いと友達の思いとの折り合いをうまく付けながら，活動していた。また，誰か一人がリーダーになって活動しているのではなく，「確かな自分の思い」をもった子どもたちが，その思いの実現のために自然な形で力を出し合っている姿が見られた。一人の子どもが木が動かないように押さえて，もう一人が木槌を動かすというように，阿吽の呼吸さえ感じられる様子も見られた。「世界でたった一つの自分たちのひみつきちをつくりたい」という共通の思いや願いが息づいていたからこそ生じた姿であったのではないかと思う。

つるでレールをつくってここからのれんを垂らそうよ

どうやってこの竹にわらをつけたらいいか

3　おわりに

1年，4年，6年の3学年の授業すべてが刻々と変わっていく子どもの姿を見ているのが楽しく，目が離せないという感じであった。新学習指導要領にも盛り込まれた色と形を通して，コミュニケーションを図り，心の底から表現を楽しむことができていた。このような授業は，次のようなことから生み出されていたのではないかと考えた。

① 題材と子どもたちの出会いの場面を大切にすることで，始めの段階から，一人一人が自分のイメージや思いを確かなものとしてもっている。

② 自分の思いを十分に繰り広げていけるだけの材料が用意されている。この豊富な材料の量が，「どう使うことが一番のよいか」といった次の活動の課題になり，工夫する活動を生み出していった。

③ つくりながら子どもたちは，自然体に友達の作品を見たり，つくり方を見て，自分の表現に必要と思われることは，取り入れていた。

④ 造形体験の積み重ねの成果か，自分の表現に自信をもっている様子が見られた。

⑤ 活動中に生まれた新たな気づきや思いが，「さらにもっとよいものにしたい」という，より高い価値に向かって進んでいった。

⑥ 子どもたちの発達段階と学習内容が適合していて，活動の中で，子どもたちの次の新しい課題が生まれていくように学習の展開がきめ細かに構成されていた。

⑦ 子どもたちがもっている自己解決力を信じ，子どもに任せる部分と導き，引き出していく部分が指導者にしっかりとイメージされていた。

「きらめく感性　ときめく思い　うみだせアート」という，大きな研究テーマを校種ごと，部会ごとに細分化し，ねらいを絞っていったことにより，目指す子ども像がしっかり浮かび上がったことにより，教師の役割がしっかりとできあがっていたことが，このような素晴らしい授業をつくりだしていたと考える。授業での子どもたちの様子を思い浮かべると，砂浜で砂遊びをしている姿に重なる部分があった。予測不可能な波の動きにかき消されても自分のつくりたいことをあれこれ試し，時間も忘れてしまう，あの楽しさと重なる。子どもたちが，一人一人もっている「目には見ない世界観」を色と形にして，目に見えるよう，色と形を使って表現していく表現活動の本来の楽しさを改めて印象づけてくれた授業公開であった。

きらめく感性　ときめく思い　うみだせアート

第62回全国造形教育研究大会　2009千葉大会　11月26日(木)27日(金)
第49回関東甲信越静地区造形教育研究大会　千葉大会
第60回千葉県造形教育研究発表大会

秋田市造形教育研究会　伊藤　知佐子

千葉大会は、１日目が千葉市の千葉県教育会館、２日目が幕張周辺の幼稚園１校、小学校３校、中学校１校、高等学校１校の６つの会場において開催された。

１日目の会場である千葉県教育会館の大ホールには、全国からの参加者約500人が一同に集まった。幼稚園、小学校、中学校、高等学校と幅広い異なる校種の教諭たちではあるが、造形教育という同じ追求課題をもつ者同士が同空間に集まったことによる奇妙な高揚感があり、会場は参加者の熱気にあふれ、千葉大会は幕を開けた。

１日目	都県代表者会議	校種別会議
	全体会・開会行事	基調提案・文部科学省講評
	記念講演	全国代議員会

◇記念講演《演題》「造形教育　これまでとこれから」
《講師》千葉大学教育学部教授　藤澤　英昭　先生

我が国の造形教育は本当に実践されたのか

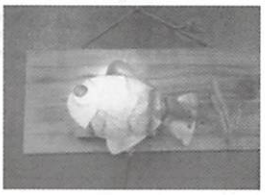
戦後新しい教育の推進役であった造形教育がどのような経緯を経て今日に至ったか。教育を受ける側からと教育者を育てる場からの60 年を振り返り、新たな時代の可能性についての考えを、我々現場の教員に語りかけてくれた。過去数回の学習指導要領改訂にともない登場するキーワード「自ら学ぶ意欲」「生きる力」という言葉に暗示されている、小中学校の教育では完結できない学習であり、生涯学び続けていってほしいというニュアンスや、学校に比重があった教育機能を家庭と社会に委ねていく危険性などについて話された。学校現場における造形教育のあり方について、これからの造形教育の可能性など、様々な角度から考えさせられる講演であった。

２日目	公開保育〈磯部白百合幼稚園〉	「わくわく　どきどき　つくってあそぼう」
	公開授業〈幕張南小学校・磯部第四小学校・幕張小学校〉	「からだいっぱい　心はずむ造形」
	〈幕張中学校〉	「豊かな表現　あふれる感性」
	〈幕張総合高等学校〉	「技を知る　個性を磨く」

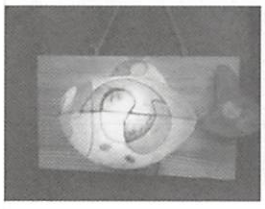
公開は保育が６クラス、小学校が６学年１２クラスの授業展開、中学校は３学年６クラスの授業、高等学校は１年選択の２クラスの授業展開であった。会場が異なるため、残念ながら他校種の授業を参観することはできなかったが、中学校における公開授業の一部を紹介する。

◇１年〈デザイン・工芸〉

「不思議な海の世界」～心和ませる「光（あかり）」のデザイン～



「光（あかり）」の効果を知り、心を和ませる「あかり」を演出する作品（間接照明）を制作する題材である。身の回りにある実用的な照明などの「光」だけでなく、キャンプファイヤーやキャンドルサービスのような、雰囲気を演出する「光」の役割について考えさせ、発想を促していた。また、日本古来の照明、提灯や行灯に使われる和紙の使用による光の透過性を意識させ、効果的に活用した作品が出来上がっていった。



◇１年〈絵画〉「絵本のプレゼント」

実際の授業はインフルエンザによる学年閉鎖のため残念ながら参観することはできなかったが、授業者と話したり、制作途中の生徒作品や同題材の他校実践作品を鑑賞することができた。また、公開に至るまでの千葉県の造形部員による数年間の研究の経緯を聞き、大変参考となった。左記のような生徒の発想を促す視覚資料作成において、公開担当の教諭だけではなく、研究チームとして共同で作成した取り組みを紹介された。また、同題材を近隣の中学校数校で実践し、研究を積み重ねてきた経緯や資料を見ることができた。

展示では、他教科とのコラボレーション題材の実践紹介が印象的であった。今回紹介されていたのは、英語科とのコラボ授業であった。ハローウィンの行事に向けての取り組みで、ALTからの話や映像資料によるアメリカの生活や文化の紹介、ハローウィンのイベントに向かう人々の思いや願いを学び、その後英語による解説文でのハローウィン用の装飾物や衣装の制作に取り組む題材であった。

◇２年〈絵画〉（２時間）

「全員全身絵画」　～ひとりひとりの思いがつまった学級の壁画をつくろう～

体育館という場で、１枚の大きい画面に自身の身体をモチーフにした壁画を表現する題材である。

「ひとりひとりの個性がつまった学級の壁画を２時間でつくろう！」という呼びかけからスタートした。　この題材は美術・総合・道徳の３つの連携を図った授業の一例として提案された。広い体育館を会場としての２時間続きの授業展開は、ダイナミックで見ごたえのあるものであった。画材の選択や準備の仕方、着彩方法の指示については、若干改善の余地がみられたが、題材自体のおもしろさに感動した。２時間で全てを仕上げるのは残念ながら無理であったが、生徒たちも満足した表情をしており、次の展開である道徳での鑑賞と振り返りの授業も見てみたいと感じた。

今大会の参加を通して次の２点について考えた。美術の教員は現在、教科時数の関係上各校に一人か二人しかいない。だからこそ、幼・保・小・中・高の縦のつながり、そして同校種同士の横のつながりをより密接にし、大切にしながら研究をしていく必要があるということ。また、美術科と他教科とのコラボレーション題材の開発とその可能性についてである。各教科の時数や年間の指導計画上、急な実践は困難であるが、今後、題材の開発に取り組み実践してみたいと感じた。

平成21年度　秋田県造形教育研究会　役員一覧

1	鹿角	石岡ひな子	平元小学校	
2	大館北秋	佐々木久隆	阿仁中学校	
3	能代山本	佐々木彰子	常盤小・中学校	副会長
4	男鹿	桐生登志夫	北陽小学校	
5	潟上南秋	中川真人	大潟小学校	
6	秋田市	佐藤一彦	下浜中学校	副会長
7	本荘・由利	三船文夫	由利小学校	
8	大仙	小原靖	南外西小学校	
9	横手	柴田薫	金沢小学校	
10	湯沢雄勝	芦原清巳	元西小学校	副会長
11	会長	羽深進	仁井田小学校	会長
12	監事	加賀谷政広	城南中学校	会計監査
13	監事	工藤圭文	港北小学校	会計監査
14	鹿角	中村雅子	平元小学校	事務局
15	大館北秋	鈴木正樹	鷹巣南中学校	事務局
16	能代山本	芹田亨	東雲中学校	事務局
17	男鹿	秋本謙逸	男鹿東中学校	事務局
18	潟上南秋	伊藤晃	大潟小学校	事務局
19	秋田市	奈良隆一	外旭川中学校	事務局
20	本荘・由利	安保純	象潟中学校	事務局
21	大仙	高橋涼	大曲中学校	事務局
22	横手	高橋輝樹	大雄中学校	事務局
23	湯沢雄勝	藤原和彦	横堀小学校	事務局
24	幹事長	小野哲	勝平小学校	事務局・ホームページ副担当
25	副幹事長	黒沢淳	土崎南小学校	ホームページ担当
26	幹事	中村紀幸	広面小学校	セミナー主担当
27	幹事	三浦直樹	御野場中学校	セミナー副担当
28	幹事	齋藤知佳子	高清水小学校	セミナー副担当
29	幹事	伊藤知佐子	御所野学院中学校	セミナー
30	幹事	進藤亨	附属小学校	セミナー
31	幹事	鎌田政美	城東中学校	美術展主担当
32	幹事	工藤敬子	山王中学校	美術展副担当
33	幹事	芳賀典子	勝平中学校	美術展
34	幹事	土門正佳	附属中学校	美術展
35	幹事	宇野佐和子	秋田北中学校	美術展
36	幹事	田口香奈美	戸米川小学校	造形秋田主担当
37	幹事	石井みどり	外旭川小学校	造形秋田副担当
38	幹事	村山祥子	日新小学校	会計・セミナー

秋田県造形教育研究会事務局
〒010－1618　秋田県秋田市新屋松美ガ丘北町14-1
TEL　018－823－5660
FAX　018－865－4669
秋田市立勝平小学校
幹事長　小　野　　哲